三重県埋蔵文化財調査報告　115－21

# 梁瀬遺跡発掘調査報告

2004(平成16)年 3月

三重県埋蔵文化財センター

梁瀬遺跡調査区全景（北上空から）

# 序

昭和63年度から始まった一般国道23号中勢道路建設に伴う発掘調査も本年度で16年目を迎えます。その間、多くの遺跡を調査してまいりましたが、考古学上の貴重な発見が数多くありました。

本書で、報告いたします梁瀬遺跡は、津市野田に所在する遺跡ですが、平成10年度の発掘調査によって平安時代の古道が発見されました。この古道は京の都から伊勢神宮に通じる官道の可能性があるものですが、国道建設に伴う発掘調査で、古道が発見されたのも何か運命的な所縁を感じます。

現地での発掘調査が終了し、ようやくこの報告書を皆様の手許にお届けすることになりました。調査の成果が、学校教育や生涯学習、あるいは地域の文化振興にお役に立つことができますよう、今後は、積極的に公開普及活動に取り組むことが私共の責務だと考えております。

文末になりましたが、調査にあたりましては、国土交通省中部地方整備局三重河川国道事務所、社団法人中部建設協会、津市教育委員会、そして地元の皆様からはあたたかいご理解とご支援、ご協力を賜りました。心から御礼申し上げます。

平成16年３月

三重県埋蔵文化財センター

所長　　吉　水　康　夫

# 例　　言

１．　本書は三重県津市野田字高栗に所在する梁瀬遺跡（津市遺跡番号848）の発掘調査報告書である。

２．　調査は三重県教育委員会が国土交通省中部地方整備局（平成12年度途中までは、建設省中部地方建設局）から委託を受け実施したもので、平成８年度と平成９年度に範囲確認調査を、平成10年度に本調査を実施した。11年度に測量写真図化、13・14年度は資料整理を行った。調査にかかる費用は、国土交通省中部地方整備局の全額負担によるものである。

３．調査の体制は下記の通りである。

・調査主体　三重県教育委員会

・調査担当　三重県埋蔵文化財センター

・調査協力　津市教育委員会

・現場作業　社団法人中部建設協会

４．　現地での発掘調査の担当者は、第１回目の範囲確認調査は宮田勝功、第２回目の範囲確認調査は米山浩之、本調査は宮田勝功と村木一弥である。遺構実測は、担当者のほかに酒井巳紀子が従事した。

５．　本書作成にかかる報文執筆者は、宮田勝功（現　三重県立図書館）、村木一弥（現　津市教育委員会）、米山浩之（現　津市教育委員会）、本堂弘之（現　芸濃町立明小学校）、川合圭子（現　鈴鹿市立玉垣小学校）、河北秀実である。分担については、目次および文末にその氏名を記した。遺物の写真撮影は東　敬義が担当した。

６．　発掘調査にあたっては、山中　章氏（三重大学）、青木哲哉氏（立命館大学）からご指導、ご助言を賜った。

７．　梁瀬遺跡の発掘調査については、下記の出版物で、その一部が既に公表されている。本報告では、これらの文献で既に報告されている内容については、その趣旨を損なわない程度に加筆修正し、さらに未発表の事柄を加筆しえた上で、全体を編集した。

『一般国道中勢道路　埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅸ（三重県埋蔵文化財センター　1997）

『一般国道中勢道路　埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅹ（三重県埋蔵文化財センター　1998）

『一般国道中勢道路　埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅺ（三重県埋蔵文化財センター　1999）

『中勢道路調査ニュース』№34（三重県埋蔵文化財センター　1999）

８．　遺構実測図、出土遺物実測図は、本報告書掲載にあたり再トレースをしているものもあるため、既報告の図とは若干異なっている場合がある。

９．　本書に用いた地図及び遺構実測図は、国土調査法の第Ⅵ座標系を基準とし、挿図の方位は全て座標北を示している。なお、当遺跡周辺の磁北は平成６年現在で、座標北からＮ６°40′Ｗ振れている。

10.　本書で報告した記録図面類、写真および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管・管理している。

11.　本書で用いた遺構表示及び範囲確認坑の略記号は、下記のとおりである。

ＳＢ：掘立柱建物　　ＳＤ：溝　　ＳＥ：井戸　　ＳＫ：土坑　　ＳＲ：道

Ｐｉｔ：柱穴・小穴　　Ｇ：範囲確認調査グリッド　　Ｔ：範囲確認調査トレンチ

12.　遺構番号は遺構の種類別に１から順に付し（例：SK１，SK２，SK３…，SD１，SD２，SD３…）、ピットについては各グリッド毎に１から順に番号を付した。なお、遺構の名称、番号は調査時点及び概報、調査ニュースでの呼称とは異なっている。

# 本文目次

序
例　言
目　次
Ⅰ　前言
1　中勢道路建設と埋蔵文化財保護 ……（川合圭子）…… 1
2　調査の体制 ……（川合圭子・河北秀実）…… 1
3　範囲確認調査の経過 ……（本堂弘之）…… 2
4　本調査の経過 ……（本堂弘之）…… 2
5　調査記録の方法 ……（河北秀実）…… 2

Ⅱ　位置と環境
1　地理的環境 ……（川合圭子）…… 3
2　歴史的環境 ……（河北秀実・村木一弥・宮田勝功）…… 3
（1）周辺の遺跡 …… 3
（2）条里 …… 3
（3）古道 …… 4
（4）近世以降の野田集落……4
Ⅲ　範囲確認調査
1　第１回目の範囲確認調査 ……（宮田勝功）…… 5
2　第２回目の範囲確認調査 ……（米山浩之）…… 5
Ⅳ　本調査
1　土層 ……（宮田勝功・河北秀実）…… 7
2　遺構 ……（宮田勝功・村木一弥）…… 8
3　遺物 ……（村木一弥・川合圭子・河北秀実）…… 14
4　放射性炭素年代測定 ……（パリノ・サーヴェイ株式会社）…… 19
Ⅴ　結語 ……（村木一弥）…… 21

# 挿図目次

第１図　遺跡位置図 …… 4
第２図　第１回範囲確認調査坑位置図 …… 5
第３図　第２回範囲確認調査トレンチ位置図 …… 6
第４図　第２回範囲確認調査主要遺構略図 …… 6
第５図　本調査区位置図 …… 6
第６図　調査区南壁および西壁土層断面図 …… 7
第７図　遺構配置図 …… 9
第８図　遺構平面図 …… 11～12
第９図　個別遺構平面及び断面実測図 …… 13
第10図　出土遺物実測図（１） …… 15
第11図　出土遺物実測図（２） …… 16

# 挿表目次

第１表　範囲確認坑一覧表 …… 5
第２表　溝一覧表 …… 10
第３表　土坑一覧表 …… 10
第４表　出土遺物一覧表 …… 17
第５表　放射性炭素年代測定結果 …… 20
第６表　暦年較正結果 …… 20

# 図版目次

ＰＬ１　範囲確認坑Ｇ19、範囲確認Ａトレンチ溝３・４ …… 25
ＰＬ２　調査前風景・調査区全景 …… 26
ＰＬ３　調査区全景 …… 27
ＰＬ４　ＳＢ１、ＳＢ２ …… 28
ＰＬ５　ＳＥ１、ＳＥ１曲げ物 …… 29
ＰＬ６　ＳＲ１、ＳＤ１・２ …… 30
ＰＬ７　ＳＲ１、ＳＤ２・３断ち割り、ＳＤ９ …… 31
ＰＬ８　ＳＤ11、ＳＫ30 …… 32
ＰＬ９　ＳＥ１、ＳＫ６～10、ＳＫ11～14・18～21 …… 33
ＰＬ10　農道南の調査区、調査風景 …… 34
ＰＬ11　出土遺物 …… 35
ＰＬ12　出土遺物 …… 36
ＰＬ13　出土遺物 …… 37

# Ⅰ　前言

## 1　中勢道路建設と埋蔵文化財保護

中勢道路は、鈴鹿市玉垣町から一志郡三雲町に至る延長33.8kmの一般国道23号のバイパスである。この道路は、鈴鹿市・河芸町・津市・久居市・嬉野町・三雲町を通り、国道23号の交通緩和とバイパス周辺の適切な土地利用を図り、中勢地区の経済発展に寄与することを目的に計画されたものである。

道路計画地内に所在する埋蔵文化財については、昭和58年に計画路線内の分布調査を行い、建設省中部地方建設局と三重県教育委員会が埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った結果、現状保存が困難な遺跡については事前発掘調査を実施し、記録保存を図ることとなった。

調査は、建設省中部地方建設局から三重県が委託を受け、昭和63年度は三重県教育委員会文化課、平成元年度からは三重県埋蔵文化財センターが調査を担当している。また、現地作業は調査の円滑化を期して、建設省中部地方建設局が社団法人中部建設協会に委託している。そして、調査事業の実施にあたっては、建設省中部地方建設局・三重県・中部建設協会の三者で「埋蔵文化財発掘調査協定書」を締結し事業を推進している。

その後、事業計画の進展に合わせて、平成３年10月31日付けで、建設省中部地方建設局・三重県・中部建設協会の三者で「変更協定書(第１回)」を、平成５年９月７日付けで「変更協定書(第２回)」を、平成10年３月31日付けで「変更協定書(第３回)」を締結し、道路建設事業との調整を図った。また、平成11年３月31日付で、改めて「埋蔵文化財発掘調査協定書」(平成11年４月１日～平成16年３月31日)を締結し、11年度以降の事業を推進している。

(川合圭子)

## 2　調査の体制

梁瀬遺跡の現地調査及び整理、報告書作成年度の調査体制は下記のとおりである。なお、調査にあたっては「県教育委員会・市町村教育委員会職員人事交流実施要綱」に基づき、津市教育委員会及び鈴鹿市教育委員会から職員の派遣を受けている。

〔平成８年度〕

主幹兼調査第二課長　山田　猛
第三係長　本堂弘之
主　事　　宮田勝功、山本義浩
技　師　　水橋公恵
主　事　　池端清行、米山浩之（津市教育委員会から派遣）
　　筒井昭仁(鈴鹿市教育委員会から派遣)
調査補助員　井早智代、杉﨑淳子、坂下真弓
　　田中美穂、池野香代、森崎　豊
　　下畑典正
室内整理員　市川嘉子、黒川敬子、太田浩子
　　森川絹代、鈴木　妙、蒔田やよい
　　新田智子

〔平成９年度〕

主幹兼調査第二課長　山田　猛
主査兼第三係長　本堂弘之
主　事　　宮田勝功
技　師　　西村美幸、水橋公恵
主　事　　池端清行、米山浩之（津市教育委員会から派遣）
　　筒井昭仁(鈴鹿市教育委員会から派遣)
調査補助員　田中美穂、池野香代、酒井巳紀子
　　坂下真弓、下畑典正
室内整理員　市川嘉子、黒川敬子、太田浩子
　　森川絹代、鈴木　妙、蒔田やよい
　　新田智子

〔平成10年度〕

主幹兼調査第二課長　吉水康夫
主査兼第三係長　本堂弘之
主　事　　宮田勝功
技　師　　西村美幸
主　事　　村木一弥、山口　格（津市教育委員会から派遣）
調査補助員　池野香代、酒井巳紀子、西脇智広
室内整理員　市川嘉子、黒川敬子、太田浩子
　　森川絹代、鈴木　妙、蒔田やよい
　　新田智子

〔平成11年度〕

主幹兼調査第二課長　吉水康夫

主査兼第三係長　本堂弘之

技　師　　川畑由紀子

主　事　　山口　格（津市教育委員会から派遣）

調査補助員　小林俊之、西脇智広

室内整理員　市川嘉子、黒川敬子、太田浩子
森川絹代、三谷　妙、蒔田やよい
新田智子、倉田由起子

〔平成13年度〕

主幹兼調査第二課長　新田　洋

主査兼第三係長　本堂弘之

主　事　　川合圭子、中川　明、東　敬義

技　師　　川畑由紀子

臨時技術補助員　川崎志乃、瀬野弥知世

調査補助員　西脇智広

室内整理員　黒川敬子、太田浩子、森川絹代
蒔田やよい、倉田由起子

〔平成14年度〕

調査研究グループ

グループリーダー　主幹　山田　猛

主　幹　　河北秀実

主　査　　宮田勝功

主　事　　東　敬義

技　師　　原田恵理子、水谷　豊

臨時技術補助員　酒井巳紀子

調査補助員　西脇智広

室内整理員　黒川敬子、太田浩子、森川絹代
蒔田やよい、倉田由起子

（川合圭子・河北秀実）

## 3　範囲確認調査の経過

梁瀬遺跡は、分布調査の結果を受けて平成８・９年度に範囲確認調査が行われた。

第１回目の範囲確認調査は、平成８年11月12日から12月18日に実施した。グリッドを30箇所に設定し、面積は474㎡であった。調査の結果、遺構はなく遺物もきわめて少なかったことから本調査の必要なしと判断した。

しかし、その後の調査で古代の道路が中勢道路を横切るかたちで通っている可能性がでてきたため、トレンチ掘りにより再度範囲確認を行うこととした。第２回目の範囲確認調査は、平成９年10月13日から21日に実施した。古代道路の確認が目的であったので、中勢道路に平行した南北方向のトレンチを東と西に設定し調査した。面積は678㎡であった。調査の結果、道路と考えられる遺構が確認され、その周辺3,620㎡の本調査が必要であると判断した。

（本堂弘之）

## 4　本調査の経過

梁瀬遺跡の調査区には約4,000㎡の置土があり、調査に先立ってそれを撤去する必要があった。撤去には意外に時間がかかり、現場調査開始は平成10年11月16日になった。しかし、作業員が増員されたこと、遺構密度があまり高くなかったことなどから調査は順調に進み、平安～鎌倉時代の遺構・遺物を確認した。遺構実測は航空測量で平成11年１月28日に実施し、図化作業については翌11年度におこなった。

（本堂弘之）

## 5　調査記録の方法

遺構実測は、１/50で航空写真測量を行い、平面図は、遺構図、遺構と５㎝コンター図、遺構と５㎝コンターと端点図の３種類を作成した。

調査区の土層断面図は１/20で手書きで作成した。井戸等の個別遺構平面図と断面図は１/10で作成した。

小地区は４×４ｍを１グリッドとした。地区割は、東西方向は道路センター杭をＮラインとし、西からＡ、Ｂ、Ｃ、……と記号を付し、南北方向は北から１、２、３……と番号を付した。

遺構の写真撮影については、カメラは４×５インチ判、６×９㎝判、35㎜判を使用し、フィルムは、白黒及びカラーリバーサルを使用した。

（河北秀実）

# Ⅱ　位置と環境

## 1　地理的環境

紀伊半島の東部に位置する三重県は、南北に長く約180㎞に及ぶ。伊勢湾に面した伊勢・志摩地方は、西に布引山地・鈴鹿山脈が連なり、近江地方・伊賀地方との境界をなし、東は伊勢湾や太平洋に面する。伊勢湾に面した北中部には多くの河川によって形成された南北約90㎞に及ぶ広大な伊勢平野が広がり、梁瀬遺跡の所在する津市は、この平野のほぼ中央部に位置する。

津市は、主に北部の志登茂川流域、中央部の安濃川および岩田川流域、南部の雲出川流域からなる。津市の中央部を流れる安濃川は、鈴鹿山系の一つ錫杖ヶ岳にその源を発し、東西方向に発達した台地や丘陵に沿って東流して伊勢湾に注ぐ。安濃川や岩田川の流域には沖積作用により形成された肥沃な平野が広がり、これを基盤にして古くから文化が栄えてきた。

梁瀬遺跡（１）は、上述の岩田川中流域右岸の岩田川と支流のおごえ川に挟まれた沖積地に位置する。発掘調査を実施した地区は、行政上は津市野田字高栗に所在し、現状は水田である。標高は5.2～5.8m程で、地形は西側の野田集落から東側のおごえ川に向かい次第に低くなる。

（川合圭子・宮田勝功）

## 2　歴史的環境

（１）周辺の遺跡

安濃川両岸の平野には様々な時代にわたる多くの遺跡が確認されており、その一部は発掘調査も実施されている。当地域の各時代の代表的な遺跡については、既刊の他遺跡の報告書に記されているので、それらを参照していただきたい。ここでは、梁瀬遺跡の時代と比較的関連のある古代から中世にかけての周辺の遺跡についてのみ概観しておきたい。なお、地図中の各遺跡の範囲については確定しがたいものもあるため、おおよその位置と範囲を示している。

安濃川と岩田川に挟まれた平野部には、里前遺跡、弐ノ坪遺跡、替田遺跡、惣作遺跡、神戸遺跡が密集して所在している。岩田川を挟んで梁瀬遺跡の対岸に位置する里前遺跡（２）では、中世の井戸が多数検出され、また遺物も石帯や大量の墨書山茶椀が出土している。弐ノ坪遺跡（３）では、平安時代前期から中期の条里方向にあった掘立柱建物群が検出されている。替田遺跡（４）では、平安～鎌倉時代の掘立柱建物が検出されており、特殊遺物としては石帯が出土している。惣作遺跡（５）では掘立柱建物が検出され、また遺物としては「大厨」の墨書土器が出土している。神戸遺跡（６）では、平安時代の掘立柱建物が検出されている。

安濃川左岸の位田遺跡（７）では、平安時代の掘立柱建物が検出され、多量の緑釉陶器も出土している。蔵田遺跡（８）では、平安時代末から鎌倉時代初頭の条里方向に近い掘立柱建物が検出されており、また「廐吏」と墨書された土器が出土していることから、近くに役所があったと考えられる。森山東遺跡（９）では、平安時代の掘立柱建物が検出されており、太田遺跡（10）や松ノ木遺跡（11）でも平安時代や中世の遺物が出土している。また納所遺跡（12）でも、範囲確認調査では、平安時代の灰釉陶器をはじめ、奈良～鎌倉時代の遺物が出土している。

これらの遺跡群から安濃川を北西に約３㎞遡った安濃町浄土寺に所在する浄土寺南遺跡・浄土寺米買遺跡（13）は、見つかった大型掘立柱建物群や出土した硯から官衙の跡と考えられている。

（２）条里

津市の四天王寺所有の国重要文化財である「民部田所勘注状」によると、平安時代の初め、安濃川や岩田川流域では条里制がおこなわれていたことがうかがえる。岩田川北岸の一部には条里地割が残っており、これらの旧安濃郡の条里の方向はN30°Ｅと考えられている。

条里関係の遺構としては、前述の蔵田遺跡の平安時代末から鎌倉時代初頭の掘立柱建物が条里方向に近いものであり、また、弐ノ坪遺跡の平安時代前期

から中期の掘立柱建物群が条里方向にあっていることが確認されている。

（３）古道

安濃川付近には平安京から伊勢神宮に向かう官道が通っていた。近江国から伊勢国へは、はじめに柘植に出てから加太越えをしていたが、仁和２（886）年に阿須波道が新たに開削され鈴鹿峠を通ることになった。官道には30里（約16km）ごとに駅家が置かれており、『延喜式』によると、伊勢神宮に向かう官道には鈴鹿、市村、飯高、度会の各駅があったとされている。伊勢神宮に向かうには関町古厩付近が推定地とされている鈴鹿駅で東海道から分かれて市村駅をとおり、松阪市付近が推定地とされている飯高駅に向かっていた。市村駅の所在地については諸説があり、津市殿村の本馬領遺跡（14）や安濃町妙法寺の大市神社付近が有力と考えられている。市村駅から南へは、野田集落から南側の谷を抜けて久居に至る経路や、また野田集落から東に向かい半田丘陵北辺部を通り藤方付近で南に曲がる経路が考えられている。梁瀬遺跡はちょうどこの東に向かうコース上にあたる。

古道関連の遺構には、梁瀬遺跡の北東約１kmの安濃川左岸にある前述の位田遺跡で検出された奈良時代の可能性のある古道SR１・２、あるいは芸濃町に所在する松山遺跡の道路状遺構などがある。

（宮田勝功・河北秀実）

（４）近世以降の野田集落

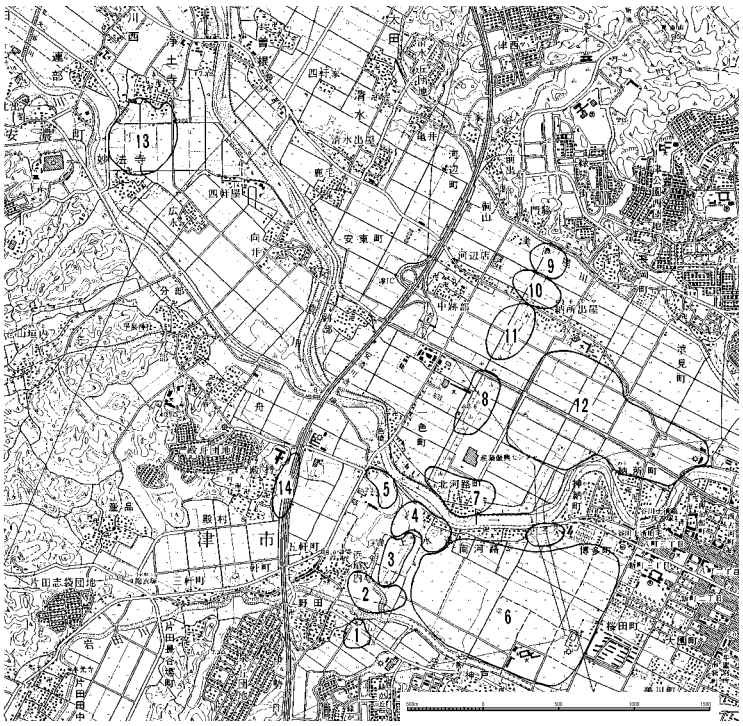
現在の大字野田は近世においては野田村であるが、その石高は、伊勢国中御検地高帳（文禄検地帳）(1594年）には「野田・浜垣内」として2045.36石と記されている。慶安郷帳では「野田村」で2046.394石、元禄郷帳（1700年）で2046.394石、天保郷帳（1834年）で2053.444石とある。

「宗国史」には寛延（1748～1751）頃に家数170、人数806、牛45と記されている。

近代に入って明治５（1872）年の村明細帳には、戸数155、人数779、馬１、牛35とされている。

なお、近世村落は現在の野田集落と平面上ほぼ重複していると考えられる。

（河北秀実）




第１図　遺跡位置図（1：50,000）

# Ⅲ　範囲確認調査

## 1　第１回目の範囲確認調査

第１回目の範囲確認調査は、県道家所・阿漕停車場線の北及び南側の計画道路センター杭№1053～1065の南北約240mの間で実施した。範囲確認調査坑は道路センターと東西両側の道路幅付近に概ね20mピッチで30箇所設定した。各グリッドの位置については、センター杭付近のものをC、道路東側幅杭付近のものをE、道路西側幅杭付近のものをWで表示した。

調査の結果、Ｇ１・G13で溝、G1で溝・ピット、G19で河道と推定される粘質土層と砂層の互層を検出した。

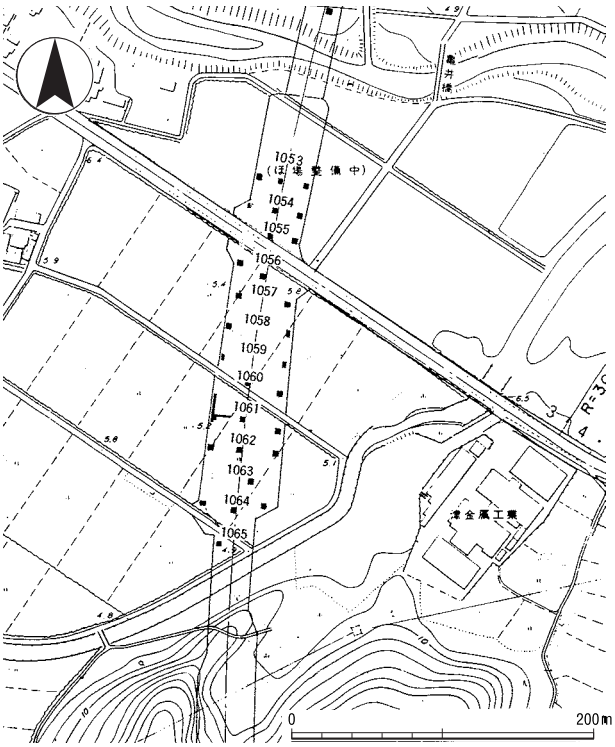
Ｇ１の溝からの出土遺物はない。G11からは山茶椀等が出土しているが、溝またはピットからの出土遺物ではなく、溝またはピットも明確な遺構とは言いがたい。G13からは土師器等の遺物があるが、土師器はかなり磨滅を受けており、溝からの出土遺物もない。

G19の河道と推定される砂層からは、弥生土器が出土した。この層の範囲を確認するためにG19から北・東・南の三方向にトレンチを約１m幅でいれた。その結果、この層は南側で試掘坑の南西隅から1.6m南まで続くことが判明した。北及び東のトレンチでは範囲外に延びることも明らかになった。粘質土層と砂層の互層は、流水による堆積と考えられ、出土した弥生土器は磨滅を受けており、流れ込みによるものと考えられる。

（宮田勝功・河北秀実）

## 2　第２回目の範囲確認調査

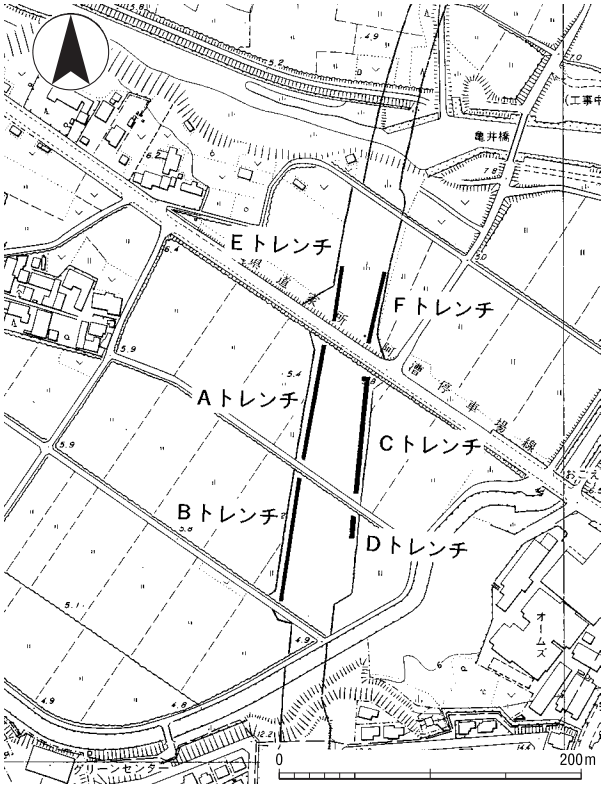
第２回目の範囲確認調査は、想定されている古道の有無の確認を主な目的として、路線の東西の両側に幅２mのトレンチを南北方向に６本設定した。なお、Dトレンチ南側の水田は１m程低く造成されており、滞水していたため調査は行わなかった。当初、県道阿漕停車場線以南をその対象範囲としたが、調査の進展に伴い県道以北にも遺構の広がる可能性があったため、その部分も合わせて調査を行った。




第２図　第１回範囲確認調査坑位置図（1：5,000）

| №. | 位　　置 | 遺　構 | 遺　物 |
|---|---|---|---|
| G1 | 1053W | 溝 | |
| G2 | 1053C | | |
| G3 | 1053E | | |
| G4 | 1054W | | |
| G5 | 1054C | | |
| G6 | 1054E | | |
| G7 | 1054+18C | | |
| G8 | 1054+18E | | |
| G9 | 1056+17W | | 山茶椀 |
| G10 | 1056+4C | | |
| G11 | 1057W | 溝、ピット | 山茶椀 |
| G12 | 1057E | | |
| G13 | 1058W | 溝 | 土師器 |
| G14 | 1058E | | |
| G15 | 1059W | | |
| G16 | 1059E | | |
| G17 | 1059+18C | | |
| G18 | 1060E | | |
| G19 | 1061W | 河道 | 弥生土器 |
| G20 | 1061C | | |
| G21 | 1061+17E | | |
| G22 | 1062W | | |
| G23 | 1062C | | 石鏃 |
| G24 | 1062E | | 土師器 |
| G25 | 1063W | | |
| G26 | 1063C | | |
| G27 | 1063+17C | | |
| G28 | 1064C | | 近世陶器 |
| G29 | 1063+15W | | |
| G30 | 1065+3W | | 近世陶器 |

第１表　範囲確認坑一覧表




第３図　第２回範囲確認調査トレンチ位置図（1：5,000）

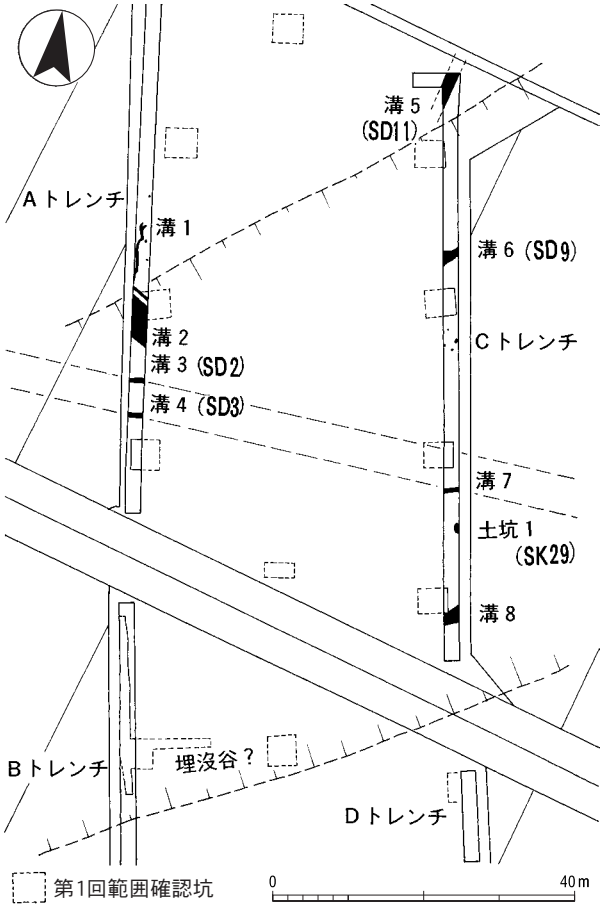
Ａトレンチ南半とＣトレンチ全面で溝・土坑・ピットが確認された。遺構は耕作土直下で検出され、遺物包含層は存在しない。Ａトレンチの溝３・４は、断面逆台形で埋土も類似し、道路側溝の可能性があると判断した。Ｃトレンチの溝５は幅1.6m、深さ0.8m、断面逆台形の溝であり、平安時代末期の山茶椀が出土している。

Ｂ・Ｄトレンチでは、明確な遺構は確認されず、遺物も出土していないが、第１回範囲確認調査のＧ19や周辺の土層の状況から南西から北東方向にＡ・Ｂ・Ｃトレンチを横切る幅60mほどの埋没谷あるいは旧河道が存在する可能性があると判断した。

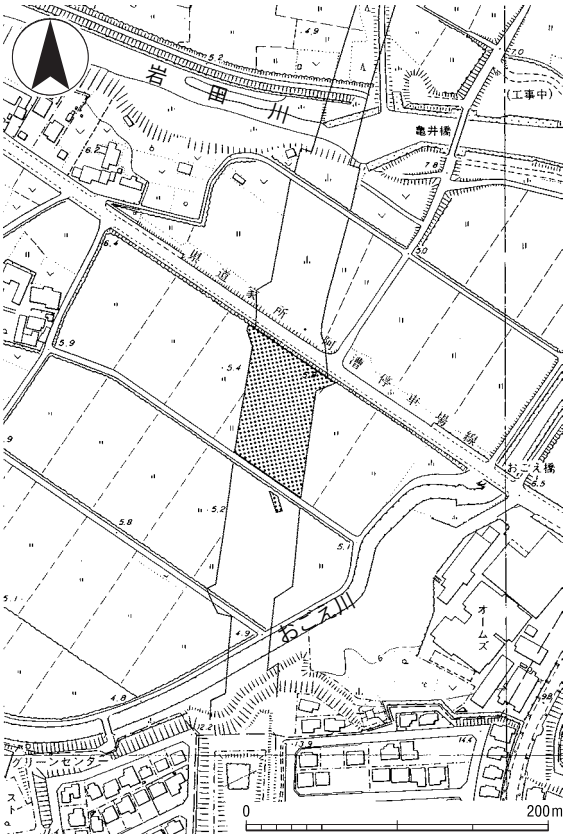
Ｅ・Ｆトレンチでは、自然流路と思われる溝１条以外は遺構・遺物とも認められない。

以上の結果、県道南側のＡ・Ｂトレンチその周辺の南北約80mの範囲で遺構が確認された。この範囲と埋没谷あるいは旧河道の確認も含めた約3,620㎡について本調査が必要であると判断した。

（米山浩之）




第４図　第２回範囲確認調査主要遺構略図（1：1,000）

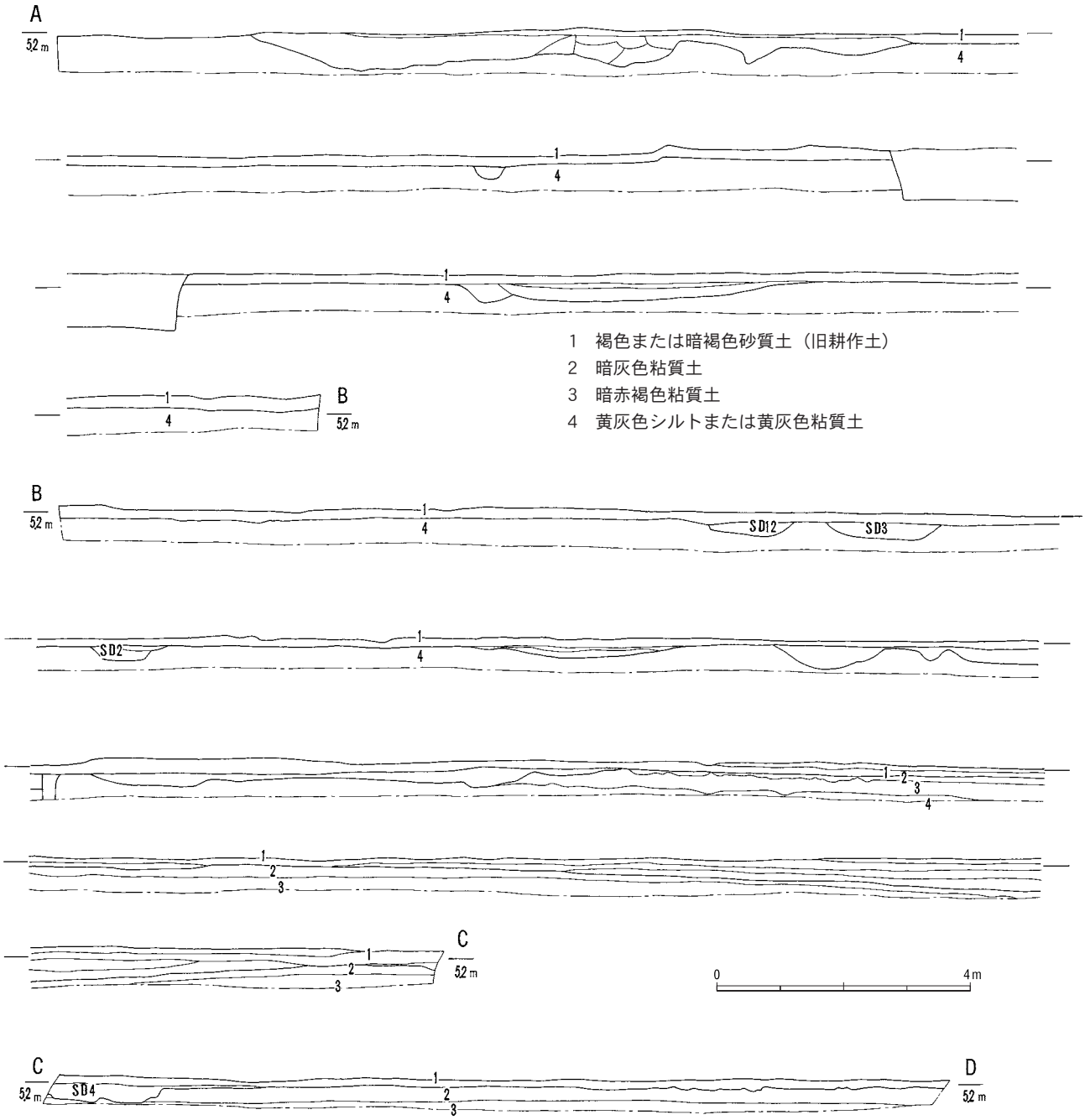



第５図　本調査区位置図（1：5,000）

# Ⅳ　本調査

## 1　土層

調査区の土層断面図は、南壁と西壁で、観察、作成した。現水田の耕作土は既に除去されており、現況観察断面での基本的な層序は、第１層が褐色または暗褐色砂質土（旧耕作土）、第２層が暗灰色粘質土、第３層が暗赤褐色粘質土、第４層が黄灰色シルトまたは黄灰色粘質土である。南半部では、第２層と第３層は見られない。遺構は北半部では第３層上面、南半部では第４層上面から切り込んでおり、この面で遺構検出を行った。なお、調査区南壁および西壁付近では削平されているため、土層断面図には表現されていないが、部分的に包含層が残存しているところもある。また岩田川の改修によって部分的に攪乱を受けており、南東部ではほ場整備による削




第６図　調査区南壁および西壁土層断面図（1：100）

平が見られた。

（宮田勝功・河北秀実）

## 2　遺構

（1）概要

検出した遺構は、掘立柱建物、井戸、溝、道路状遺構、土坑などで、時期は平安時代から鎌倉時代であるが、近世以降の用水溝も検出している。また農道南の調査区で弥生時代の旧河道の南岸も検出している。

（宮田勝功）

（2）弥生時代の遺構

旧河道

農道南の調査区では、旧河道の南岸を確認した。埋土の堆積した状況を観察したところ、農道の付近にはもともと小さな谷があり、旧河道はこの部分を流れており、調査区の東方を流れるおごえ川のかつての流路と考えられる。本調査では遺物は出土していないが、平成８年度の第１回範囲確認調査で弥生土器が出土している。

（村木一弥）

（3）平安時代から鎌倉時代の遺構

①掘立柱建物

調査区内にはピットが集中する部分もあったが、掘立柱建物として確認できたものは２棟のみである。

SB１　北側が調査区外となるため、全体の規模はわからない。４間×１間以上で、建物の方向は道路状遺構SR１の方向とほぼ同じである。桁行きは９ｍで、柱間は2.25mすなわち７尺５寸等間である。梁行きは、１間分しか確認できなかったが、これも柱間は2.25mである。柱穴はいずれも方形で、総柱建物になると考えられる。柱穴の埋土は、灰褐色である。出土遺物がまったくないため時期は不明であるが、形態的にはSB２より新しく、平安時代末以降のものと考えられる。

SB２　調査区のほぼ中央で確認した３間×１間の東西棟の側柱建物で、建物の方向は、条里地割りの方向とほぼ同じである。桁行きは７ｍで柱間は不揃いである。梁行きは、4.5mすなわち15尺であるが、本来は２間で、妻柱の柱穴が浅くて検出できなかったものであろう。柱穴埋土は灰褐色系の土である。出土遺物は土師器の細片であるが、平安時代のものと考えられる。

②井戸

SE１　掘形は直径1.7mの円形で、深さは1.2mの井戸である。湧水はほとんどなく、底には径50cm程の曲物が１段据えられていた。埋土は、上部が黄色混じりの灰褐色土で、下部が青灰色粘土混じりの青灰色砂である。土器等の遺物が出土していないため、時期は不明であるが、位置的にみてSB１に伴うものと考えられる。

③道路状遺構と側溝

SR１・SD２・SD３　平成９年度の範囲確認調査で存在が明らかになったものであるが、調査区の西端から約20mにわたって確認することができた。路床施設はみられなかったが、両端には側溝が掘られており、側溝の幅は0.5m～１m程で、側溝の芯芯距離は約４ｍで、ほぼまっすぐに東西に延びている。調査区の南東部が広範囲にわたって削平されていることもあって、これ以上側溝の続きを確認することはできなかったが、約10m東にある細長い土坑SK31・32を北の側溝SD２の続きとみれば、この遺構は緩やかに湾曲しながら東へ続いていたと考えることできる。SR１の方向は周辺の条里地割りの方向より約10°北偏している。出土遺物は少ないが、平安時代末頃までは機能していたものと考えられる。

④溝

SD９　調査区中央東側で検出したもので、長さ27m以上、幅0.8～1.2m、深さ0.3～1.0mである。埋土から土師器甕、山茶椀が出土している。

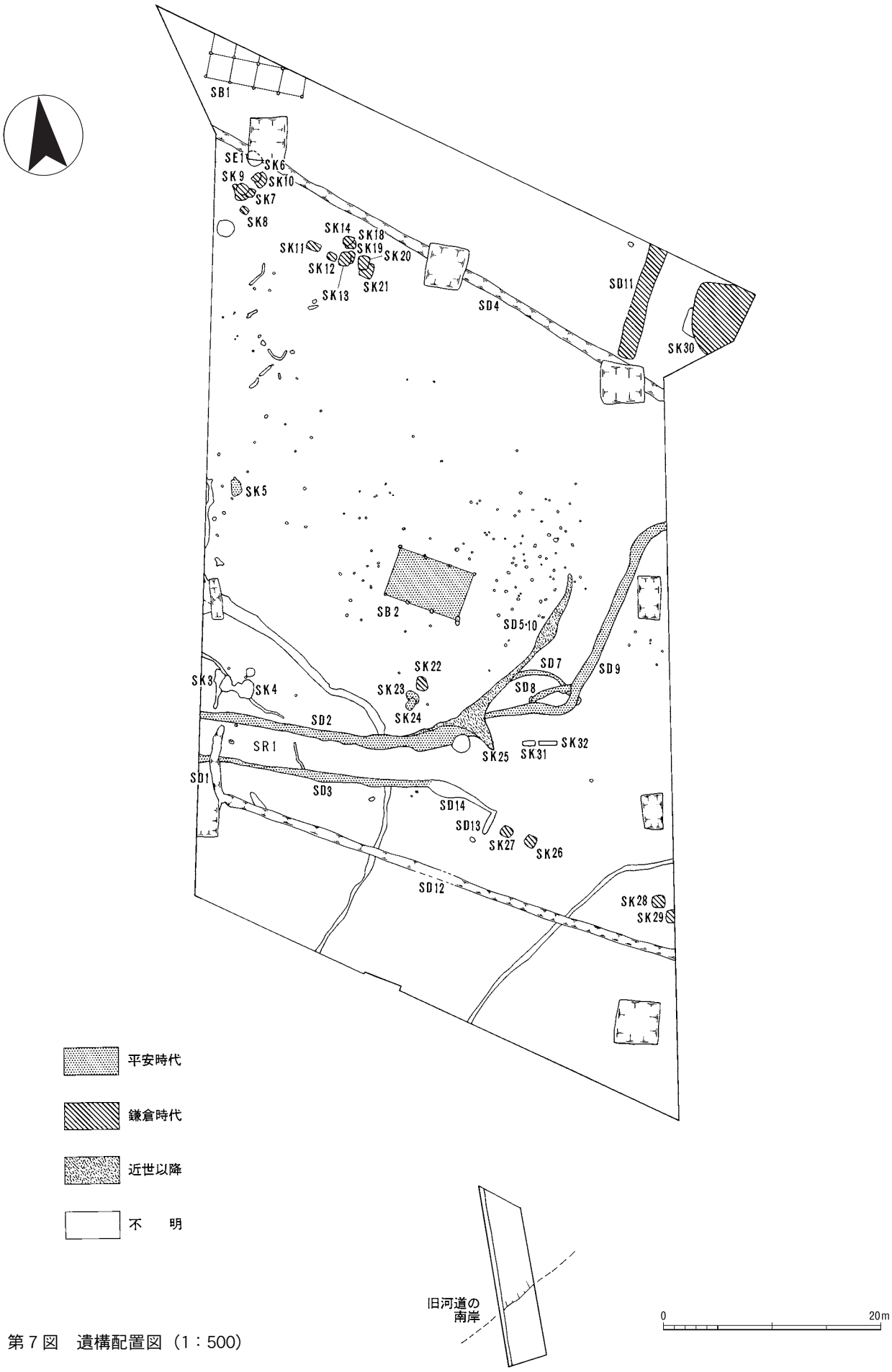
SD11　調査区の北東で検出したもので、長さは11m以上、幅1.4～1.8m、深さ0.5～0.6mで、断面は逆台形である。ロクロ土師器や山茶椀が出土している。

⑤土坑

土坑は20基以上確認したが、各々の規模等は第３表のとおりである。一辺１m前後の方形のものが多く、調査区の北側に多くみられる。出土遺物は少ないが、山茶椀が出土しているものが多く、大半は鎌倉時代のものと考えられる。

（4）近世の遺構

①　溝



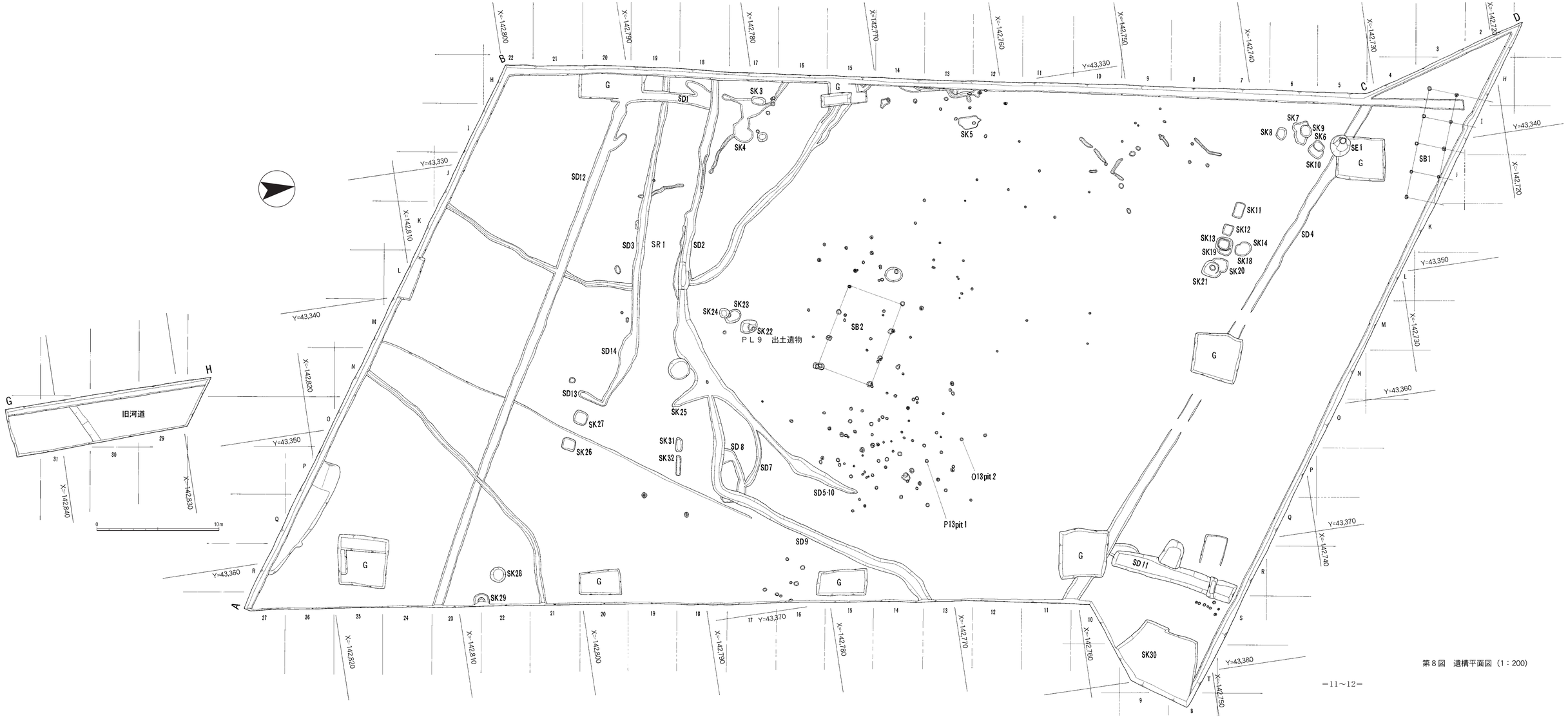

第７図　遺構配置図（1：500）

| 遺構名 | 長さ(m) | 幅(m) | 深さ(m) | 埋　　土 | 時代 | 出　土　遺　物 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SD1 | 7.5 | 0.8 | 0.2 | | 近現代 | 土師器甕(10)、須恵器鉢(13)、山茶椀(14) | |
| SD2 | 23 以上 | 0.5~1.0 | 0.1~0.2 | | 平安 | | 道路状遺構 SR1 の側溝 |
| SD3 | 21 以上 | 0.5~1.0 | 0.1~0.2 | | 平安 | | 道路状遺構 SR1 の側溝 |
| SD4 | 24.5 以上 | 0.9~1.2 | ~0.3 | | 近現代 | | |
| SD5・10 | 20 | 0.4~1.3 | 0.1 | 褐灰色砂質土、淡灰色砂質土、褐灰色粘質土、青灰色粘質土 | 近世 | | |
| SD6 | 欠　番 | | | | | | |
| SD7 | 4.8 | 0.4~0.6 | 0.1 | 灰色粘質土 | 平安 | | |
| SD8 | 3.3 | 0.5~1.2 | 0.1 | | 平安 | | |
| SD9 | 27 | 0.8~1.2 | 0.1~0.3 | 褐灰色粘質土、灰色砂質土 | 平安 | 土師器甕(17)、山茶椀(16) | 概報番号 SD2 |
| SD11 | 11 以上 | 1.4~1.8 | 0.5~0.6 | 灰色粘質土に暗褐粘質土混じり | 鎌倉 | ロクロ土師器(18・19)、山茶椀(20・21) | 概報番号 SD1 |
| SD12 | 47 以上 | 0.8 | 0.1~0.2 | | 現代 | | |
| SD13 | 2.4 | 0.5 | 0.2 | 灰色 | 不明 | | |
| SD14 | 6 | 0.4~1.4 | 0.1~0.2 | 灰褐色砂質土 | 不明 | | |

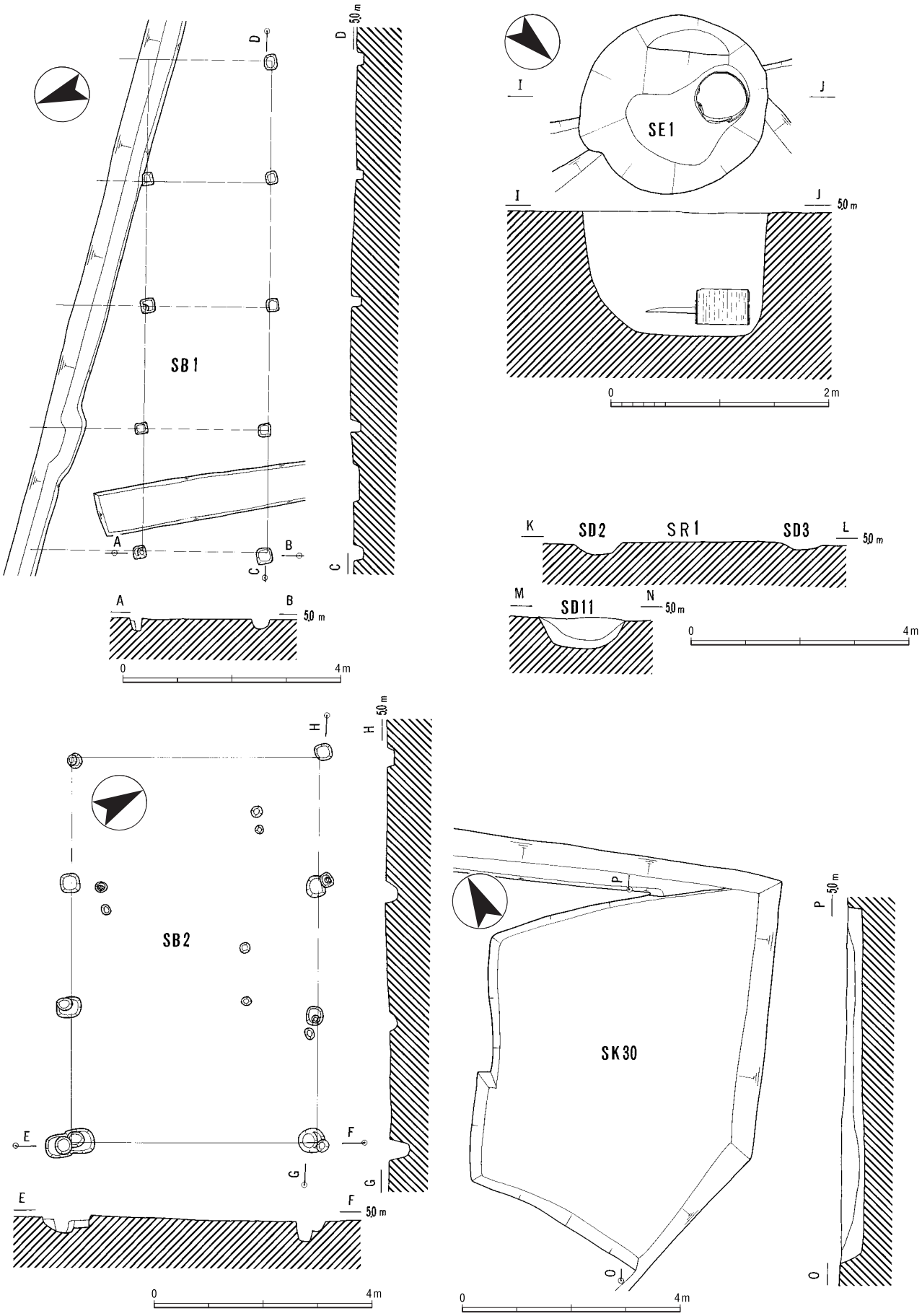
第２表　溝一覧表

| 遺構名 | 形態 | 平面規模(m) | 深さ(m) | 埋土 | 時代 | 出土遺物 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SK1 | 欠　番 | | | | | | |
| SK2 | 欠　番 | | | | | | |
| SK3 | | 3.5 × 0.6 | 0.2 | 黒灰色粘質土 | 不明 | | |
| SK4 | | 3.2 × 1.6 | 0.1 | 淡黒灰色粘質土 | 不明 | | |
| SK5 | 不定形 | 1.7 × 1.0 | 0.2 | 黒灰色 | 平安 | | |
| SK6 | 方形 | 0.9 × 0.7 | 0.5 | 灰褐色土に黄色混じり | 鎌倉 | | SK10 より新 |
| SK7 | 不定形 | 1.8 × 1.2 | 0.2 | 灰褐色土に黄色混じり | 鎌倉 | | SK9 より古 |
| SK8 | 方形 | 1.0 × 0.8 | 0.8 | 灰褐色土に黄色混じり | 鎌倉 | | |
| SK9 | 円形 | 径 1.0 | 0.4 | 灰褐色土 | 鎌倉 | | SK7 より新 |
| SK10 | 方形 | 1.3 × 0.9 | 0.4 | 灰褐色土 | 鎌倉 | | SK6 より古 |
| SK11 | 方形 | 1.3 × 0.8 | 0.2 | 灰褐色土に黄色混じり | 鎌倉 | | |
| SK12 | 方形 | 0.8 × 0.7 | 0.2 | 灰褐色土に黄色混じり | 鎌倉 | | |
| SK13 | 方形 | 1.3 × 1.1 | 0.5 | 灰褐色土に黄色混じり | 鎌倉 | 山茶椀(11) | SK19 より新、概報番号 SK1 |
| SK14 | 不定形 | 1.0 × 0.8 | 0.2 | 灰褐色土に黄色混じり | 鎌倉 | | SK18 より新 |
| SK15 | 欠　番 | | | | | | |
| SK16 | 欠　番 | | | | | | |
| SK17 | 欠　番 | | | | | | |
| SK18 | | 1.0 × 0.8 | 0.2 | | 鎌倉 | | SK14 より古 |
| SK19 | 方形 | 1.0 × 0.6 以上 | 0.3 | 灰褐色土に黄色混じり | 鎌倉 | | SK13 より古 |
| SK20 | 方形 | 1.2 × 1.1 | 0.3 | 褐色粘質土に灰白色粘質土混じり | 鎌倉 | 灰釉陶器(10) | SK21 より新、概報番号 SK2 |
| SK21 | 方形 | 1.5 × 1.3 | 0.4 | 灰色粘質土に褐灰色粘質土混じり | 鎌倉 | | SK20 より古 |
| SK22 | 方形 | 1.3 × 1.0 | 0.2 | 褐灰色粘質土 | 不明 | | |
| SK23 | 楕円形 | 1.3 × 1.0 | 0.2 | 褐灰色粘質土 | 不明 | | SK24 より古 |
| SK24 | 円形 | 径 0.8 | 0.8 | 灰色粘質土 | 不明 | | SK23 より新 |
| SK25 | 不定形 | 3.0 × 1.5 | 0.2 | | 近世 | | |
| SK26 | 方形 | 1.1 × 1.0 | 0.7 | 灰色に黄褐色混じり | 鎌倉 | | |
| SK27 | 方形 | 1.1 × 1.1 | 0.7 | 灰色に黄褐色混じり | 鎌倉 | | |
| SK28 | 円形 | 径 1.2 | 0.9 | 灰褐色 | 鎌倉 | | |
| SK29 | 円形？ | 径 1.2 | 0.8 | 灰褐色 | 鎌倉 | | 一部調査区外 |
| SK30 | 不定形 | 7.0 × 4.7 以上 | 0.4 | 暗橙粘質土 | 鎌倉 | 土師器杯(12)、山茶椀(13・14) | 調査時 SH1、概報番号 SK3 |
| SK31 | 方形 | 1.1 × 0.5 | 0.1 | 褐灰色粘質土 | 平安？ | | SD の続きか？ |
| SK32 | 方形 | 1.6 × 0.4 | 0.1 | 褐灰色粘質土 | 平安？ | | SD の続きか？ |

第３表　土坑一覧表




第８図　遺構平面図（1：200）




第９図　個別遺構平面及び断面実測図（SB1・2、SR1、SD2・3・11、SK30は1：100、SE1は1：50）

SD５・10がある。規模等については、第２表に示した。

② 土坑

SK25がある。

（５）近現代の遺構

溝SD１・４・12がある。

（６）時期不明の遺構

溝SD13・14、SK３・４・22～24がある。

（村木一弥）

## ３　遺物

（１）概要

縄文時代から近世にかけての遺物が出土したが、遺構密度が低いうえに、遺物包含層もほとんどなかったため、遺物量は少なく、小片が多い。縄文土器、土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、山茶椀、白磁、近世の陶磁器類、製塩土器、土錐、曲物などが出土した。遺物の多くは包含層から出土したが、遺構からはおもに平安時代から鎌倉時代の遺物が出土した。

（村木一弥）

（２）縄文時代の遺物

①石器

石鏃（１）

第１次範囲確認調査坑№23出土である。サヌカイト製の凹基無茎鏃で、長さ1.9㎝、幅1.5㎝、厚さ0.2㎝、重さ0.8gである。

②土器

縄文土器(２～４)

（２・３）には突帯がみられる。（４）は口縁部に沈線をめぐらすもので、晩期の深鉢である。

（３）弥生時代の遺物

弥生土器壷（５）

第１次範囲確認調査坑№19から出土したもので、口径19㎝の中期の広口壷である。頸部は直立し、口縁は大きく外に開き、端部外面に面をもつ。口縁内面には四方向に瘤状突起をもち、突起の中央部にヘラで凹みをつくる。頸部には沈線をめぐらし、沈線と沈線の間には縄文を施す。口縁部外面にはタテ方向のハケメを、口縁端部外面には櫛描烈点文を施す。口縁部内面はヨコハケで調整する。

（４）古代～中世の遺物

①SE１出土遺物

木製品

曲物(６)

井戸の井筒に使用されていたもので、側板に３段の箍をはめて、さらに側板と箍の間に３本の添木を縦に挿入する。曲物の直径は48.8㎝、高さ34㎝である。側板は径48㎝、高さ34㎝、厚さ0.5～0.7㎝で、内面には、幅0.5～1.0㎝の間隔で縦方向のケビキをいれる。綴合せは１列内５段綴じで、樺皮の幅は1.7㎝である。

箍は、一番上のものは幅8.5㎝前後、厚さは0.3～0.5㎝である。綴合せは２箇所で行い、２列前外３段後内２段綴じと１列内２段綴じである。接合部の樺皮の幅は0.6～0.7㎝である。二番目の箍は幅8.7～9.3㎝、厚さは0.3～0.5㎝である。綴合せは２箇所で行い、２列前外４段後内２段綴じと１列内３段綴じである。接合部の樺皮の幅は0.6㎝程である。三番目、すなわち最下段の箍は幅9.2～9.6㎝、厚さは0.3～0.5㎝である。綴合せは２箇所で行っているが、２列前上外下内３段後上内下外２段綴じと１列内３段綴じである。接合部の樺皮の幅は0.4㎝と0.7㎝である。添木は、長さ33～34㎝、厚さ0.3㎝前後であり、幅は７㎝、6.5㎝、3.7㎝とそれぞれ異なる。下段の箍の下部に径0.5㎝の円形の穿孔が15箇所みられ、側板まで貫通しており、このうち４箇所で木釘が残存する。釘結合曲物の底板をはずして、井戸枠として転用したものと考えられる。

②道路上遺構、側溝及び関連遺物（７～15）

ア）SD２（SR１北側側溝）出土遺物（10・11・13・14）

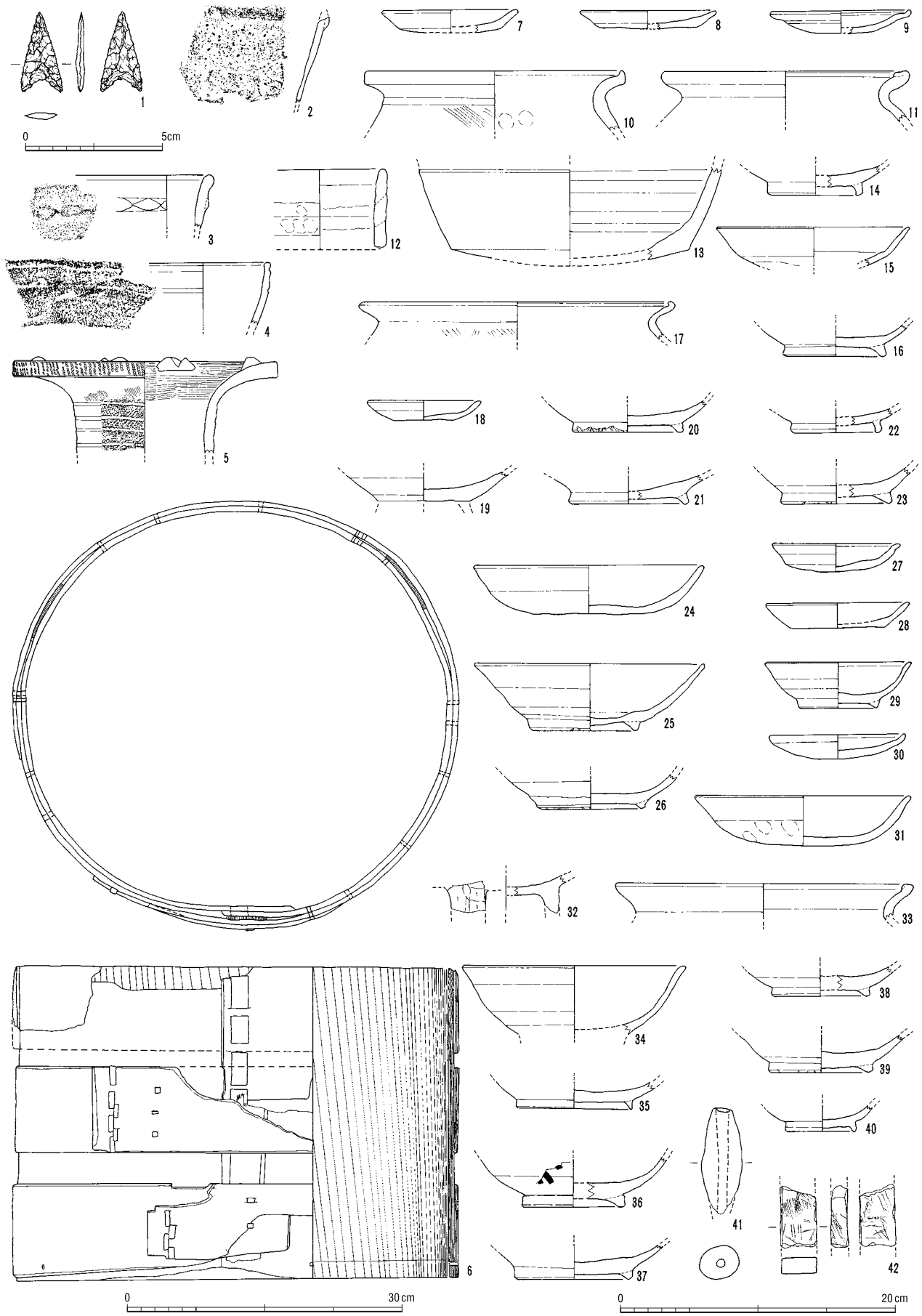
土師器甕、須恵器鉢、山茶椀が出土した。

土師器甕(10)　口縁は「く」の字状に外反し、端部をつまみ上げる。頸部外面はハケ調整である。口縁部の小片であるが、長胴甕になるものと思われる。

須恵器　(13)　底部から体部下半にかけての破片である。内外面ともロクロナデである。沈線を施す。ロクロ回転は時計回りである。

山茶椀(14)　底部片である。高台は推定高６㎝で、断面は「ハ」の字に開く。

イ）SR１の上面出土遺物（７～９・15）




第10図　出土遺物実測図（1）（1：4、ただし1・41は1：2、6は1：6）

土師器小皿(７・８)　口径約10cm、底径約７cm、器高1.3～1.6cmである。体部から口縁部はヨコナデである。

土師器小皿(９)　推定口径10cm、器高1.7cmである。いわゆる「て」の字状口縁皿で、口縁部はヨコナデである。

白磁皿(15)　推定口径14cmである。体部に稜をもつ皿で、内面には沈線をもつ。外面体部上半に施釉がみられる。

③SD９出土遺物

土師器甕(17)　口頸部の小片である。口縁は「く」の字状に外反し、端部をつまみ上げる。体面にハケメが見られる

山茶椀(16)　底部～体部下半のみ残存する。高台は径6.8cmで、「ハ」の字に開く。

④SD11出土遺物

土師器小皿(18)　推定口径８cm、推定底径４cm、器高1.3cmである。底部は平底で、体部は直線的に開き、口縁端部は丸い。

土師器(19)

山茶椀(20・21)　ともに底部から体部下半のみ残存する。高台は径８cm程で、「ハ」の字状に開く。(20)には籾殻痕が多く見られる。

⑤SK20出土遺物

灰釉陶器(22)　底部が１/５程残存する小片である。高台は貼り付け高台で、断面は三日月形を呈する。折戸53号窯式であろう。

⑥SK13出土遺物

山茶椀(23)　底部から体部下半の小片である。高台の推定径は８cmで、「ハ」の字状に開く。

⑦SK30出土遺物

土師器杯(24)　推定口径17cm、器高3.1cmである。口縁部はヨコナデ、底部外面は未調整である。

山茶椀(25・26)　(25)は口径16.7cm、器高5.1cmで、高台径は(25・26)とも７cm程である。体部は直線的で、高台の断面は逆台形である。

⑧ピット出土遺物（27～30）

Ｐ13地区Ｐｉｔ１出土遺物

土師器小皿(27)　口径９cm、器高2.2cmである。口縁部はヨコナデによって、やや外反し、端部は丸く終わる。

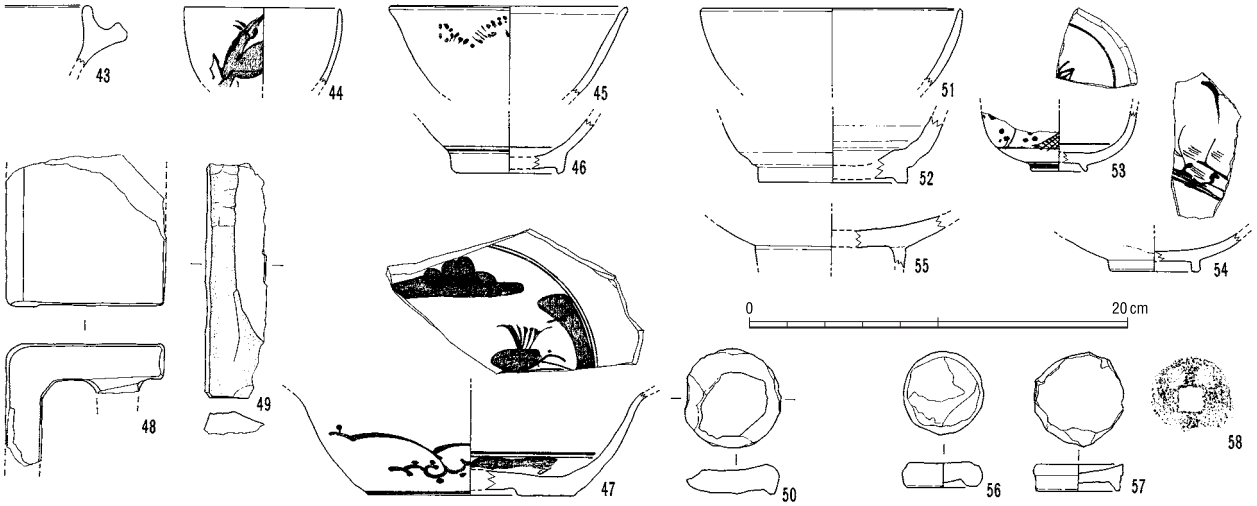
ロクロ土師器小皿(28)　推定口径10cm、推定底径７cm、器高1.7cmである。底部は平底で、体部は直線的に斜めに延び、口縁端部は丸くおさめる。ロクロ成形で、底部外面には糸切り痕を残す。

山茶椀系小椀(29)　推定口径11cm、器高3.4cm、推定高台径６cm弱である。高台は断面逆三角形で、体部は内湾するが、口縁部でやや外反し、端部は丸く終わる。

013地区Ｐｉｔ２出土遺物（30・31）

土師器小皿(30)　口径4.9cm、器高1.8cmである。底部は丸みをおび、体部との境界は不明瞭である。口縁部はヨコナデである。

土師器杯(31)　口径15.7cm、器高3.8cmである。口




第11図　出土遺物実測図（２）（1：4、ただし50・56～58は1：2）

| 遺物番号 | 実測番号 | 出土遺構出土位置 | 器種 | 口径(cm) | 器高(cm) | 底径高台径 | 技法の特徴 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 残存度 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 015-01 | 範囲確認№23 | 石鏃 | 長 2.9 | 幅 1.5 | 重量 0.8g | 打製、凹基無茎 | | | | | サヌカイト |
| 2 | 014-02 | R13　包含層 | 縄文土器 | | | | 突帯 | 粗、砂粒含み | やや軟 | 灰白 | 小片 | |
| 3 | 012-02 | R13 包含層 | 縄文土器 | | | | 突帯 | 石粒含む | やや軟 | 褐灰 | 口縁部小片 | 概報番号 30 |
| 4 | 007-05 | SK24 | 縄文土器深鉢 | | | | 沈線 | 粗、砂粒含み | 良 | 灰 | 口縁部小片 | |
| 5 | 011-01 | 範囲確認旧河道 | 弥生土器壺 | 19.2 | | | 沈線、縄文、刺突文、ハケメ、瘤状突起 | 石粒含み | 良 | 橙 | 口頸部 1/3 | |
| 6 | 016 - 01 | SE1 | 曲物 | 48.8 | 34.0 | | 側板ケビキ、箍、添木 | | | | | 概報番号 25 |
| 7 | 012-04 | SR1 上面 | 土師器小皿 | (9.7) | | | ヨコナデ、ナデ | 石粒含み | 良 | 灰白 | 1/5 | 概報番号 21 |
| 8 | 012-06 | SR1 上面 | 土師器小皿 | (9.8) | 1.3 | (7.1) | ヨコナデ、オサエ | 石粒含み | 良 | 浅黄橙 | 2/3 | 概報番号 22 |
| 9 | 012-03 | SR1 上面 | 土師器小皿 | (10.1) | 1.7 | | ての字状口縁、ヨコナデ、ナデ | 石粒含み | 良 | 灰白 | 1/5 | 概報番号 23 |
| 10 | 001-02 | SD2 | 土師器甕 | (18.5) | | | ヨコナデ、ハケメ | 石粒含み | 良 | 灰白 | 口縁部小片 | 煤付着、概報番号 1 |
| 11 | 013-07 | SD2 上面 | 土師器甕 | (17.8) | | | ヨコナデ | やや粗、砂粒含み | 良 | 橙 | 口縁部 1/8 | |
| 12 | 012 - 05 | SR1 上面 | 製塩土器 | | | | ナデ、オサエ | 粗、小石含み | 並 | 浅黄橙 | 体部小片 | |
| 13 | 001-03 | SD2 | 須恵器壺 | | | (17.4) | 沈線、ロクロナデ | 並 | 良 | 灰白 | 下半 1/6 | 自然釉、概報番号 2 |
| 14 | 001-01 | SD2 | 山茶椀 | | | (6.2) | ロクロナデ、糸切り痕、貼り付け高台 | 密 | 良 | 灰白 | 底部 1/3 | 概報番号 3 |
| 15 | 012-01 | SR1 上面 | 白磁　皿 | (14.1) | | | 内面に沈線、ロクロナデ | 密 | 良 | 灰白 | 口縁部 1/8 | 施釉、概報番号 24 |
| 16 | 004-01 | SD9 | 山茶椀 | | | (6.8) | ロクロナデ、糸切り痕、貼り付け高台 | 砂粒含み | 良 | 灰白 | 底部 1/2 | 概報番号 4 |
| 17 | 004-02 | SD9 | 土師器甕 | (22.4) | | | ヨコナデ、ハケメ | 砂粒含み | 良 | 灰白 | 口縁部小片 | 概報番号 5 |
| 18 | 005-03 | SD11 | 土師器小皿 | (8.1) | 1.3 | (4.0) | ヨコナデ | 砂粒含み | 良 | 灰白 | 1/4 | 概報番号 6 |
| 19 | 005-04 | SD11 | 土師器椀 | | | | ロクロナデ、糸切り痕、貼り付け高台 | 砂粒含み | 良 | 灰白 | 底部のみ | 概報番号 7 |
| 20 | 005-01 | SD11 | 山茶椀 | | | (7.8) | ロクロナデ、糸切り痕、貼り付け高台、籾殻痕 | 砂粒含み | 良 | 灰白 | 底部 2/3 | 概報番号 9 |
| 21 | 005-02 | SD11 | 山茶椀 | | | (8.3) | ロクロナデ、糸切り痕、貼り付け高台 | 砂粒含み | 良 | 灰白 | 底部 1/5 | 概報番号 8 |
| 22 | 007-01 | SK20 | 灰釉陶器椀 | | | (6.0) | ロクロナデ、貼り付け高台 | 密 | 堅 | 灰白 | 底部 1/5 | 重ね焼き痕、概報番号 10 |
| 23 | 007-04 | SK13 | 山茶椀 | | | (7.8) | ロクロナデ、糸切り痕、貼り付け高台、籾殻痕 | 砂粒含み | 良 | 灰白 | 底部 1/5 | 概報番号 11 |
| 24 | 006-03 | SK30 | 土師器杯 | (16.7) | 3.1 | | ヨコナデ、ナデ | 砂粒含み | 良 | 灰白 | 1/5 | 概報番号 12 |
| 25 | 006-02 | SK30 | 山茶椀 | 16.7 | 5.1 | 7.4 | ロクロナデ、糸切り痕、貼り付け高台、籾殻痕 | 砂粒含み | 良 | 灰白 | 4/5 | 概報番号 14 |
| 26 | 006-01 | SK30 | 山茶椀 | | | 7.2 | ロクロナデ、糸切り痕、貼り付け高台、籾殻痕 | 砂粒含み | 良 | 灰白 | 底部のみ | 概報番号 13 |
| 27 | 010-02 | P13　Pit1 | 土師器小皿 | 9.0 | 2.2 | | ヨコナデ、ナデ、オサエ | 砂粒含み | 良 | 浅黄橙 | 完形 | 概報番号 15 |
| 28 | 010-03 | P13　Pit1 | 土師器小皿 | (10.3) | 1.7 | (6.9) | ロクロナデ、糸切り痕 | 砂粒含み | 良 | 褐灰 | 1/2 | 概報番号 16 |
| 29 | 010-01 | P13　Pit1 | 小椀 | (10.6) | 3.4 | (5.6) | ロクロナデ、糸切り痕、貼り付け高台 | 砂粒含み | 良 | 灰白 | 2/5 | 概報番号 17 |
| 30 | 009-01 | 013　Pit2 | 土師器小皿 | 9.8 | 1.8 | | | 砂粒含み | 良 | 灰白 | ほぼ完形 | 概報番号 18 |
| 31 | 009-02 | 013　Pit2 | 土師器杯 | 15.7 | 3.8 | | ヨコナデ、ナデ、オサエ | 砂粒含み | 良 | 褐灰 | ほぼ完形 | 概報番号 19 |
| 32 | 013-05 | N20 包含層 | 須恵器 | | | | ロクロナデ、ケズリ | 砂粒含み | 良 | 灰白 | 脚部小片 | |
| 33 | 014-01 | 013 包含層 | 土師器鍋 | (21.7) | | | ヨコナデ | やや粗、砂粒含み | 並 | 灰白 | 口縁部 1/7 | |
| 34 | 013-04 | N20 包含層 | 山茶椀 | (16.2) | | | ロクロナデ | 密 | 良 | 灰白 | 上半 1/4 | |
| 35 | 013-03 | K20 包含層 | 山茶椀 | | | (8.4) | ロクロナデ、糸切り痕、貼り付け高台 | 砂粒含み | 良 | 灰白 | 底部のみ | |
| 36 | 005-06 | 範囲確認 CT | 山茶椀 | | | (7.3) | ロクロナデ、貼り付け高台 | 密、砂粒含み | 良 | 灰白 | 底部～体部下半 | 体部に墨書 |
| 37 | 013-01 | K17 包含層 | 山茶椀 | | | 8.2 | ロクロナデ、糸切り痕、貼り付け高台 | 砂粒含み | 良 | 灰白 | 底部のみ | |
| 38 | 005-05 | 範囲確認 CT | 山茶椀 | | | (6.7) | ロクロナデ、糸切り痕、貼り付け高台 | 密 | 良 | 灰白 | 底部 1/3 | |
| 39 | 013-02 | I16 包含層 | 山茶椀 | | | 7.1 | ロクロナデ、糸切り痕、貼り付け高台 | 砂粒含み | 良 | 灰白 | 底部のみ | |
| 40 | 014-06 | N18 包含層 | 陶器椀 | | | 4.9 | ロクロナデ、削り出し高台 | 密 | 良 | 灰白 | 底部 | 白施釉 |
| 41 | 014-03 | I17 包含層 | 土錐 | 長 3.8 | 幅 1.5 | 重量 5.1g | | やや密、砂粒含み | 並 | 灰白 | 一部欠損 | |
| 42 | 013-06 | N18 包含層 | 砥石 | 残長 4.5 | 幅 2.6 | 厚 1.3 | 四面使用 | 砂岩 | | | 小片 | |
| 43 | 003-02 | SD5 | 瓦質土器焙烙 | | | | ナデ | 並 | 良 | 灰白 | 口縁部小片 | |
| 44 | 002-04 | SD5 | 磁器椀 | (8.3) | | | ロクロナデ | 密 | 良 | 灰白 | 体部 1/5 | 施釉 |
| 45 | 002-03 | SD5 | 陶器椀 | (12.4) | | | ロクロナデ | 密 | 良 | 灰白 | 体部 1/8 | 施釉 |
| 46 | 002-02 | SD5 | 陶器椀 | | | (5.4) | ロクロナデ、削り出し高台 | 並 | 良 | 灰白 | 底部 1/4 | 施釉 |
| 47 | 002-01 | SD5 | 磁器鉢 | | | (11.0) | ロクロ成形、削り出し高台 | 密 | 良 | 灰白 | 底部～体部 1/3 | 施釉 |
| 48 | 003-01 | SD5 | 瓦質製品 | | | | ナデ | 長石含み | 良 | 暗灰 | 小片 | |
| 49 | 003-03 | SD5 | 石硯 | 残存長 12.3 | | | | | | | 破片 | |
| 50 | 002-05 | SD5 | 加工円盤 | 径 5.2 | 厚 1.3 | 重量 38.6g | 陶器椀高台部を加工 | 並 | 並 | 淡黄 | ほぼ完形 | |
| 51 | 007-03 | SK25 | 陶器椀 | (13.8) | | | | 密 | 良 | 灰白 | 口縁部小片 | |
| 52 | 007-02 | SK25 | 陶器椀 | | | (7.9) | ロクロナデ | 並 | 良 | 灰白 | 底部 1/8 | 施釉 |
| 53 | 008-02 | SK25 | 陶器椀 | | | (3.1) | ロクロナデ、削り出し高台 | 並 | 良 | 白 | 底部 1/4 | 施釉 |
| 54 | 008-01 | SK25 | 陶器椀 | | | (4.7) | ロクロナデ、削り出し高台 | 並 | 良 | 灰白 | 底部 1/2 | 施釉 |
| 55 | 001-04 | SD2 攪乱 | 磁器椀 | | | (8.0) | ロクロナデ | 密 | 良 | 淡明青灰 | 底部 1/5 | 施釉 |
| 56 | 014-07 | N17 包含層 | 加工円盤 | 径 3.1 | 厚 | 重量 24.6g | 陶器椀高台部を加工 | 密 | 良 | 灰白 | ほぼ完形 | |
| 57 | 014-04 | N18 包含層 | 加工円盤 | 径 4.1 | 厚 | 重量 28.4g | 陶器椀高台部を加工 | 密 | 良 | 灰白 | ほぼ完形 | |
| 58 | 014-05 | N17 包含層 | 鋳貨 | 径 2.3 | | | 寛永通宝 | | | | 一部欠損 | |

第４表　出土遺物一覧表

縁部はやや外反し、端部は丸く終わる。口縁部はヨコナデで調整する。体部下半には指頭圧痕が、明瞭に残る。

⑨その他の遺物（33～42）

33は土師器鍋、34～39は山茶椀である。36の体部外面には墨痕がみられる。41の土錐と42の砥石は明確な時代は不明ではあるが、当該期が最も可能性が高いと判断して、ここで取り扱った。

（５）近世の遺物

① SD５出土遺物（43～50）

43は瓦質土器焙烙、44は磁器椀である。45・46は陶器の椀であるが、同一個体の可能性がある。47は磁器鉢、48は瓦質の製品、49は石硯、50は加工円盤である。

② SK25出土遺物（51～54）

いずれも陶器の椀である。

③ その他の遺物（55～58）

55は肥前の波佐見焼の磁器椀と考えられるもので、18世紀から19世紀初頭のものである。56・57は、加工円盤で、陶器椀の高台部を転用したものである。58の銭貨は寛永通宝である。

（川合圭子、河北秀実）

## ４　放射性炭素年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

津市に所在する梁瀬遺跡は岩田川右岸の氾濫原に位置する。調査区内では平安・鎌倉以前に形成された流路跡が確認されている。この流路の充填埋積物は、数ユニットに区分され、各ユニットより堆積物試料が採取されている。また、流路により浸食された地層中に有機質の堆積物が確認されている。本報告では、流路の形成、埋没までのプロセスを検討することを目的として、各ユニット中に認められた堆積物について加速器による放射性炭素年代測定（ＡＭＳ法）を実施し、その堆積年代に関する情報を得る。

１．試料

試料は、梁瀬遺跡南北トレンチ西壁の土層断面より採取された有機質の堆積物２点(No.1、2)と木材片３点(No.３～５)、農道南調査区西壁の土層断面より採取された有機質の堆積物１点(No.６)と木材片２点(No.７、８)および調査区内の土層から採取された炭化材1点(No.９)の合計９点である。

南北トレンチ西壁における試料間の層位関係は、上位よりNo.3、4、5、1、2の順であり、農道南調査区西壁における試料間の層位関係は、上位よりNo.8、7、6である。なお、木材片および炭化材の種類については、測定結果を呈示した表１に併記する。

２．分析方法

測定は株式会社加速器研究所の協力を得て、AMS法により行った。なお、放射性炭素の半減期はLIB-BYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer) を用いた。

３．結果

結果を表１に示す。また、暦年較正を行った年代を表２に示す。

南北トレンチ西壁では、No.１と２、No.４と５のそれぞれの間で層位と測定年代（同位体補正年代）との逆転が認められるが、全体的には約4000年前から2800年前頃までに至る年代の傾向が読みとれる。一方、農道南調査区西壁では、層位と年代との関係に逆転は認められず、約3800年前から2400年前頃までに至る年代が得られた。また、No.９は約4000年前の年代を示す。

ここで、これらの結果から推定される流路の形成と埋積の年代について述べる。まず、流路に浸食されている地層については、有機質の堆積物から4000年前頃の年代が得られているが、これは、堆積物中に含まれる様々な由来を持った炭素分から得られた値であり、それが直接、堆積年代を示すとは限らない。しかし、今回の場合、流路内の木材片に3600年前の値を示すもの(No.３)や3900年前の値を示す炭化材が認められていることから、有機質の堆積物が示す年代は、堆積年代からそれ程ずれていないと考えられる。すなわち、およそ4000年前頃の堆積層を浸食して流路が形成されている可能性がある。次に、流路の形成年代については、南北トレンチ西壁では2900～2800年前頃、農道南調査区西壁では2400年前頃にそれぞれ考えられ、埋積は、その年代以降に進行したと言える。

今後、さらに年代測定例を蓄積し、周辺との層序対比や遺構・遺物の検出・出土層位などとの関係を検討することができれば、より確実な堆積過程の復元が期待される。

| No. | 採取地点 | 層位 | 試料の質 | 種類 | 補正年代 BP | δ 13 C (‰) | 測定年代 BP | Code.No. |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 南北トレンチ　西壁 | 下位 | 有機質堆積物 | － | 4010 ± 40 | -23.52 | 3990 ± 40 | IAAA-31142 |
| 2 | | 最下位 | 有機質堆積物 | － | 3910 ± 50 | -20.15 | 3830 ± 40 | IAAA-31143 |
| 3 | | 最上位 | 生材 | ムクロジ | 2790 ± 40 | -25.91 | 2800 ± 30 | IAAA-31144 |
| 4 | | 上位 | 生材 | コナラ属アカガシ亜属 | 3670 ± 50 | -29.30 | 3740 ± 40 | IAAA-31145 |
| 5 | | 中位 | 生材 | キハダ | 2920 ± 40 | -22.95 | 2890 ± 40 | IAAA-31146 |
| 6 | 農道南調査区西壁 | 下位 | 有機質堆積物 | － | 3800 ± 40 | -19.37 | 3700 ± 40 | IAAA-31147 |
| 7 | | 中位 | 生材 | クリ | 2450 ± 40 | -25.24 | 2460 ± 40 | IAAA-31148 |
| 8 | | 上位 | 生材 | ムクロジ | 2350 ± 40 | -29.91 | 2430 ± 30 | IAAA-31149 |
| 9 | － | － | 炭化材 | イネ科タケ亜科 | 3950 ± 40 | -22.92 | 3910 ± 40 | IAAA-31150 |

1）年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
2）BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
3）付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68％が入る範囲）を年代値に換算した値。

第５表　放射性炭素年代測定結果

| No. | 補正年代 (BP) | 暦年較正年代（cal） | | | 相対比 | Code No. |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 4009 ± 39 | cal BC 2,570 - cal BC 2,517 | cal BP 4,520 - 4,467 | | 0.666 | IAAA-31142 |
| | | cal BC 2,500 - cal BC 2,473 | cal BP 4,450 - 4,423 | | 0.334 | |
| 2 | 3913 ± 44 | cal BC 2,467 - cal BC 2,396 | cal BP 4,417 - 4,346 | | 0.609 | IAAA-31143 |
| | | cal BC 2,388 - cal BC 2,339 | cal BP 4,338 - 4,289 | | 0.373 | |
| | | cal BC 2,317 - cal BC 2,313 | cal BP 4,267 - 4,263 | | 0.018 | |
| 3 | 2789 ± 38 | cal BC 997 - cal BC 898 | cal BP 2,947 - 2,848 | | 1.000 | IAAA-31144 |
| 4 | 3665 ± 44 | cal BC 2,135 - cal BC 2,079 | cal BP 4,085 - 4,029 | | 0.415 | IAAA-31145 |
| | | cal BC 2,055 - cal BC 2,008 | cal BP 4,005 - 3,958 | | 0.341 | |
| | | cal BC 2,002 - cal BC 1,976 | cal BP 3,952 - 3,926 | | 0.210 | |
| | | cal BC 1,969 - cal BC 1,963 | cal BP 3,919 - 3,913 | | 0.034 | |
| 5 | 2919 ± 37 | cal BC 1,209 - cal BC 1,201 | cal BP 3,159 - 3,151 | | 0.045 | IAAA-31146 |
| | | cal BC 1,190 - cal BC 1,178 | cal BP 3,140 - 3,128 | | 0.092 | |
| | | cal BC 1,161 - cal BC 1,141 | cal BP 3,111 - 3,091 | | 0.134 | |
| | | cal BC 1,131 - cal BC 1,041 | cal BP 3,081 - 2,991 | | 0.707 | |
| | | cal BC 1,028 - cal BC 1,024 | cal BP 2,978 - 2,974 | | 0.022 | |
| 6 | 3796 ± 38 | cal BC 2,288 - cal BC 2,196 | cal BP 4,238 - 4,146 | | 0.816 | IAAA-31147 |
| | | cal BC 2,167 - cal BC 2,144 | cal BP 4,117 - 4,094 | | 0.184 | |
| 7 | 2452 ± 37 | cal BC 758 - cal BC 685 | cal BP 2,708 - 2,635 | | 0.361 | IAAA-31148 |
| | | cal BC 660 - cal BC 645 | cal BP 2,610 - 2,595 | | 0.072 | |
| | | cal BC 586 - cal BC 584 | cal BP 2,536 - 2,534 | | 0.008 | |
| | | cal BC 543 - cal BC 480 | cal BP 2,493 - 2,430 | | 0.310 | |
| | | cal BC 468 - cal BC 447 | cal BP 2,418 - 2,397 | | 0.100 | |
| | | cal BC 443 - cal BC 412 | cal BP 2,393 - 2,362 | | 0.148 | |
| 8 | 2347 ± 36 | cal BC 483 - cal BC 465 | cal BP 2,433 - 2,415 | | 0.137 | IAAA-31149 |
| | | cal BC 450 - cal BC 440 | cal BP 2,400 - 2,390 | | 0.059 | |
| | | cal BC 426 - cal BC 424 | cal BP 2,376 - 2,374 | | 0.010 | |
| | | cal BC 413 - cal BC 379 | cal BP 2,363 - 2,329 | | 0.794 | |
| 9 | 3947 ± 39 | cal BC 2,550 - cal BC 2,542 | cal BP 4,500 - 4,492 | | 0.057 | IAAA-31150 |
| | | cal BC 2,490 - cal BC 2,402 | cal BP 4,440 - 4,352 | | 0.760 | |
| | | cal BC 2,376 - cal BC 2,352 | cal BP 4,326 - 4,302 | | 0.182 | |

計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4（Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer）を使用
計算には表に示した丸める前の値を使用している。
付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68％が入る範囲）を年代値に換算した値。

第６表　暦年較正結果

# Ⅴ　結語

## 1　遺跡の範囲

今回調査を行った部分は、攪乱や削平を受けていることもあるが、全体に遺構の密度が低いことから、遺跡の縁辺部にあたるものと考えられる。付近の地形が東を流れるおごえ川に向かって低くなっていることからみると、この遺跡の中心は調査区よりもう少し西の方にあるものと考えられる。

## 2　道路状遺構と古道

今回の調査では、道路状遺構SR１を約20mにわたって確認した。他の遺構と重複したり、ほ場整備の際に削平を受けたりしていることもあって、側溝SD２・３の続きを調査区の東端まで追うことはできなかったが、北側溝SD２の延長線上にある細長い土坑SK31・32をこの溝の続きとみれば、SR１はわずかに湾曲しながら東方へ続いていたと考えることもできる。SR１の存続時期については、なお検討を要するが、出土遺物から判断して下限については平安時代末頃で、上限についても平安時代のなかでおさまるものと考えられる。

位置と環境の項で述べたとおり梁瀬遺跡の所在する岩田川の右岸では，調査区西側の野田集落付近から半田丘陵北辺部を通って海岸部の藤方付近に至る東西方向の古道が想定されている。今回、確認した道路状遺構SR１は平安時代のものと考えられるが、これが想定されている古道に相当するのか現時点ではわからない。周辺の条里との関係など、幅広い分野での検討が必要であろう。

## 3　条里方向と検出遺構の方位

道路状遺構SR１と掘立柱建物SB１・２との関係をみれば、SR１の約10m北にSB２が、約60m北にSB１がある。建物の方向は、SB２がSR１より10°南偏するのに対して、SB１はSR１とほぼ同じ方向を示している。SB１は時期不明であるが、形態的には中世的ないわゆる総柱建物であり、時期は平安時代末以降と考えられるもので、SR１と同時に存在した可能性もある。

この付近では、岩田川北岸の弐ノ坪遺跡の周辺で条里制の地割りを認めることができるが、今回確認した道路状遺構の方向は、条里の方向と平行ではなく、反時計回りに約10°傾いていた。側溝から出土した遺物は多くはないが、平安時代のものと考えられる。

（村木一弥）

〔註〕

① a．駒田利治「位置と環境」『一般国道23号中勢道路（9工区）建設事業に伴う　松ノ木遺跡・森山東遺跡・太田遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1993

b．中川　明『神戸遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1999

c．水谷　豊『惣作遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2002

d．米山浩之『一般国道23号中勢道路建設事業に伴う位田遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1999

e．中村光司『一般国道23号中勢道路建設事業に伴う位田遺跡（第２次）発掘調査報告』津市教育委員会　2002

f．米山浩之・宮田勝功『一般国道23号中勢道路（10工区）建設事業に伴う　蔵田遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1999

g，川崎志乃『一般国道23号中勢道路（10工区）建設事業に伴う　里前遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2002

②註①ｇに同じ

③池端清行・米山浩之・宮田勝功「弐ノ坪遺跡」『一般国道23号　中勢道路　埋蔵文化財発掘調査概報Ｘ』三重県埋蔵文化財センター　1998

④a．池端清行・水橋公恵「替田遺跡（第１次）」『一般国道23号　中勢道路　埋蔵文化財発掘調査概報Ⅸ』三重県埋蔵文化財センター　1997

b．水橋公恵・筒井昭仁・西村美幸「替田遺跡（第２次）」『一般国道23号　中勢道路　埋蔵文化財発掘調査概報Ｘ』三重県埋蔵文化財センター　1998

⑤註①ｃに同じ

⑥a．註①ｂに同じ

b．柴山圭子「神戸遺跡（Ａ地区）調査の結果」『神戸遺跡（第２次）・替田遺跡（第３次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2001

⑦a．註①ｄに同じ

b．註①ｅに同じ

⑧ 註①ｆに同じ

⑨米山浩之「蔵田遺跡」『三重県産業振興センター埋蔵文化財発掘調査概報』津市教育委員会　1993

⑩駒田利治・竹内英昭・増田安生・倉田直純・清水正明・小菅文裕・山口　格・本堂弘之・浅生悦生・中村光司・穂積裕昌・渡辺尚登『一般国道23号中勢道路（９工区）建設事業に伴う　松ノ木遺跡・森山東遺跡・太田遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1993

⑪伊藤久嗣・吉水康夫ほか『納所遺跡範囲確認調査報告』三重県文化財連盟　1976

⑫a．中村信裕「浄土寺南遺跡」『昭和55年度県営圃場整備事業地域　埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会　1981

b．早川裕己「浄土寺米買遺跡」『昭和56年度県営圃場整備事業地域　埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会　1982

⑬『津市四天王寺文書』平安遺文980号

⑭仲見秀雄「奄芸・安濃・一志郡の条里制」『伊勢湾岸地域の古代条里制』株式会社東京堂出版　1979

⑮岡田　登「伊勢国市村駅所在地考」『皇學館論叢』第13巻　第６号　1980年

⑯註⑮に同じ

⑰註①ｄに同じ

⑱「松山遺跡」『三重県埋蔵文化財年報』18　三重県教育委員会　1988

⑲a．平松令三監修「日本歴史地名大系」第24巻　三重県の地名　株式会社平凡社　1983

b．「三重県史」資料編　近世１　三重県　1993

⑳a．註⑲ａに同じ

b．「三重県史」資料編　近世１　別冊　三重県　1993

註⑳ｂに同じ

註⑲ａに同じ

註⑲ａに同じ

# 写 真 図 版

範囲確認坑Ｇ19（南から）

範囲確認Ａトレンチ溝３・４（南東から）

ＰＬ２

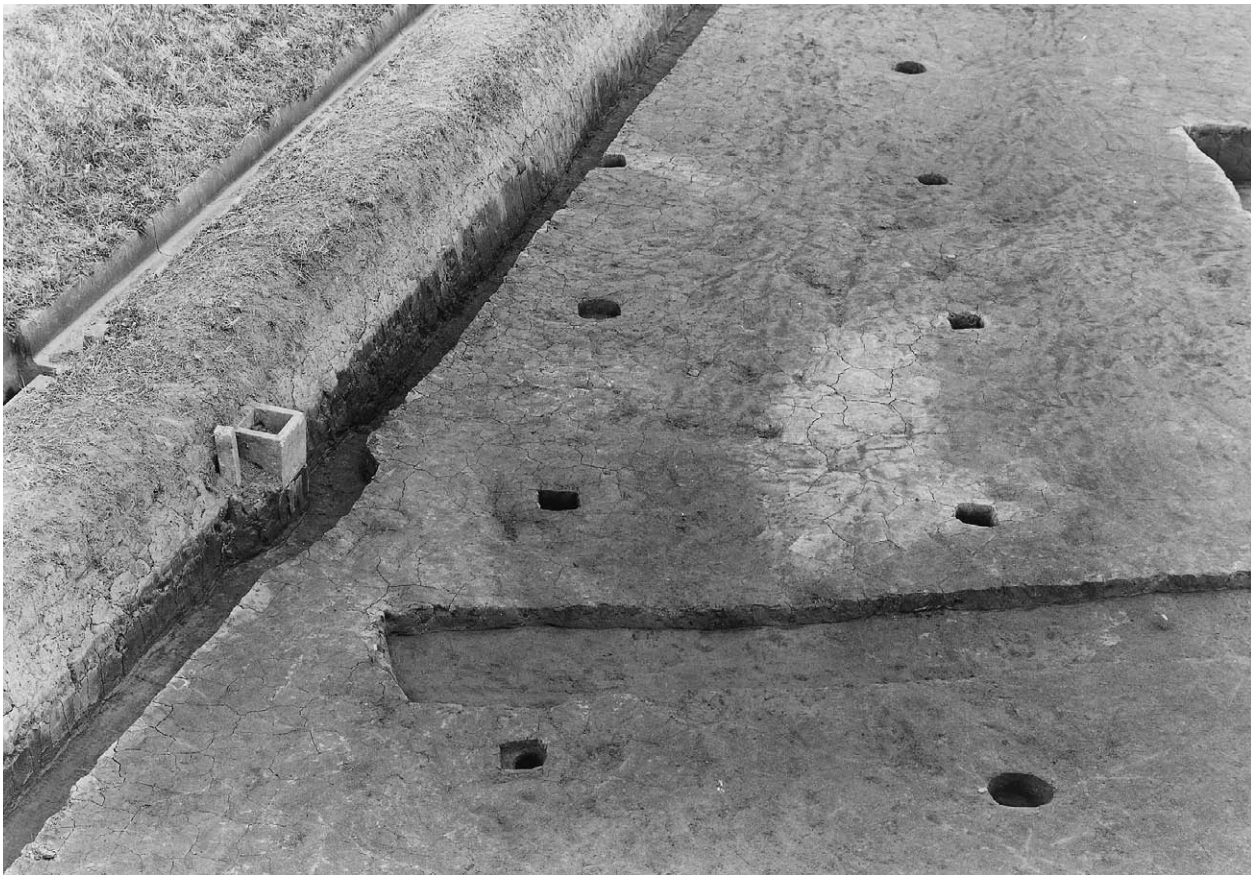
調査前風景（南から）

調査区全景（西上空から）

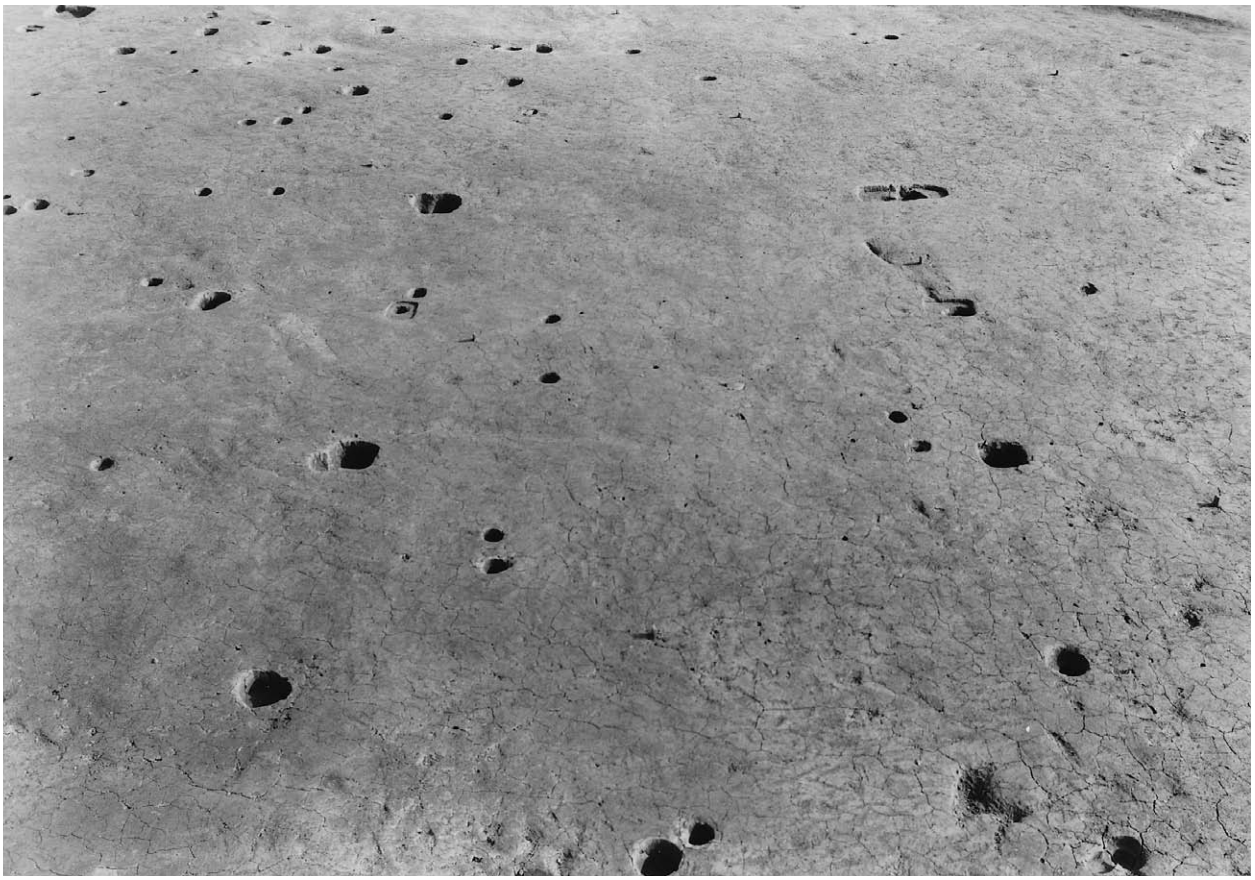
調査区全景（南から）

調査区全景（北から）

ＰＬ４



SB1（西から）



SB2（西から）

SE1（北東から）

SE1曲げ物（北東から）

ＰＬ６

SR1、SD2・3（東から）

SR1、SD2・3（西から）

SR1、SD2・3断ち割り（西から）

SD9（南西から）

ＰＬ８

SD11（南から）

SK30（西から）

SE1、SK6～10（北から）

SK11～14・18～21（西から）

ＰＬ10

農道南の調査区（南から）

調査風景

5

25

31

27

28

29

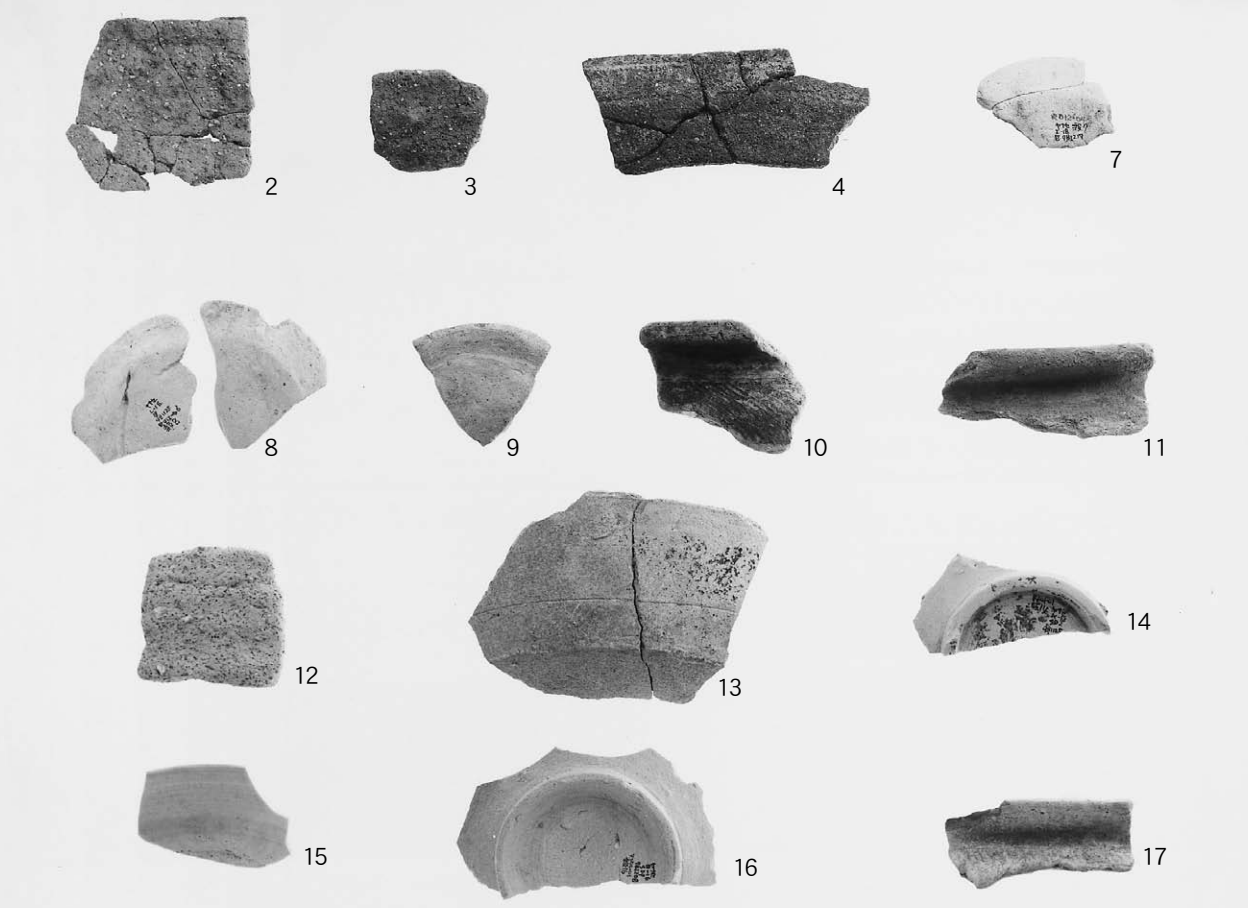
30

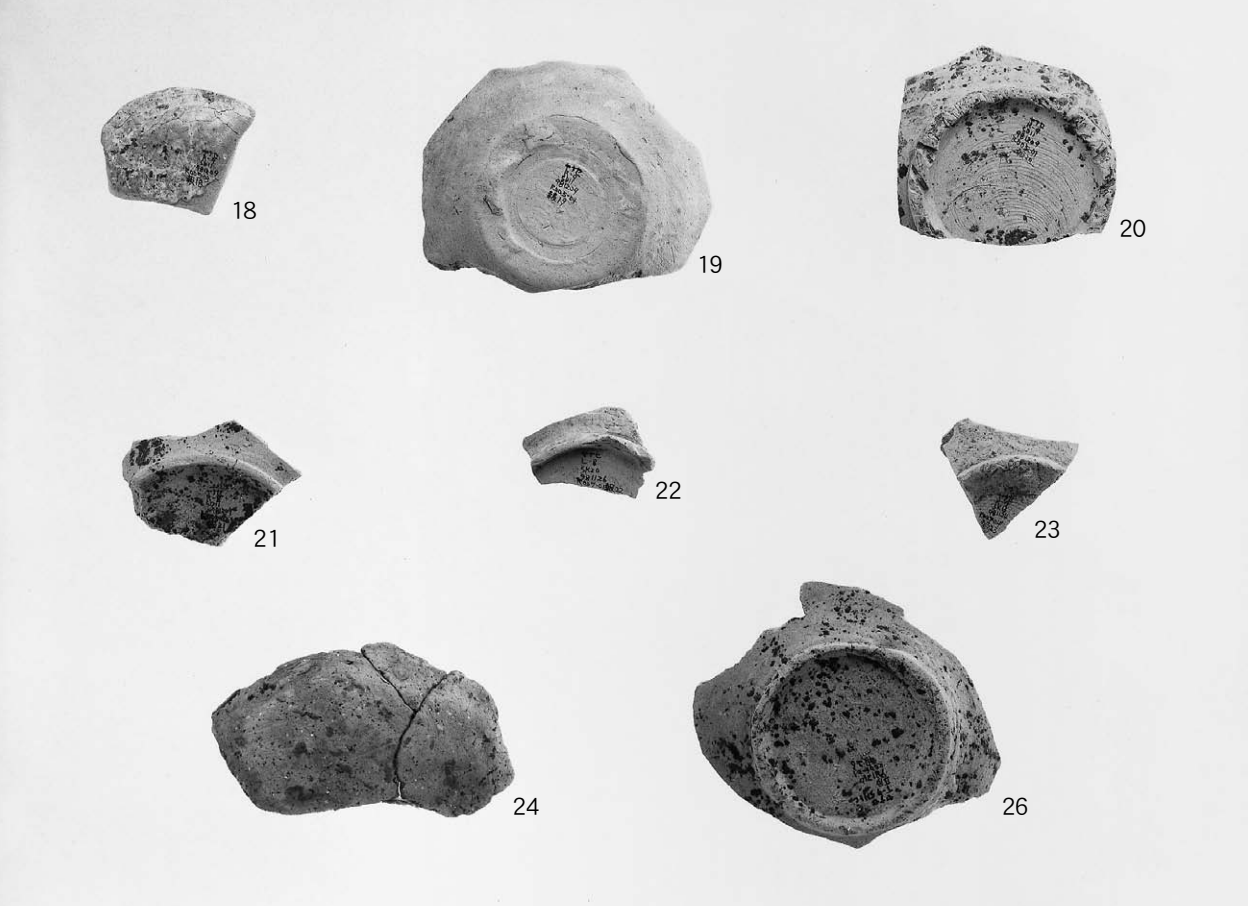
1

58

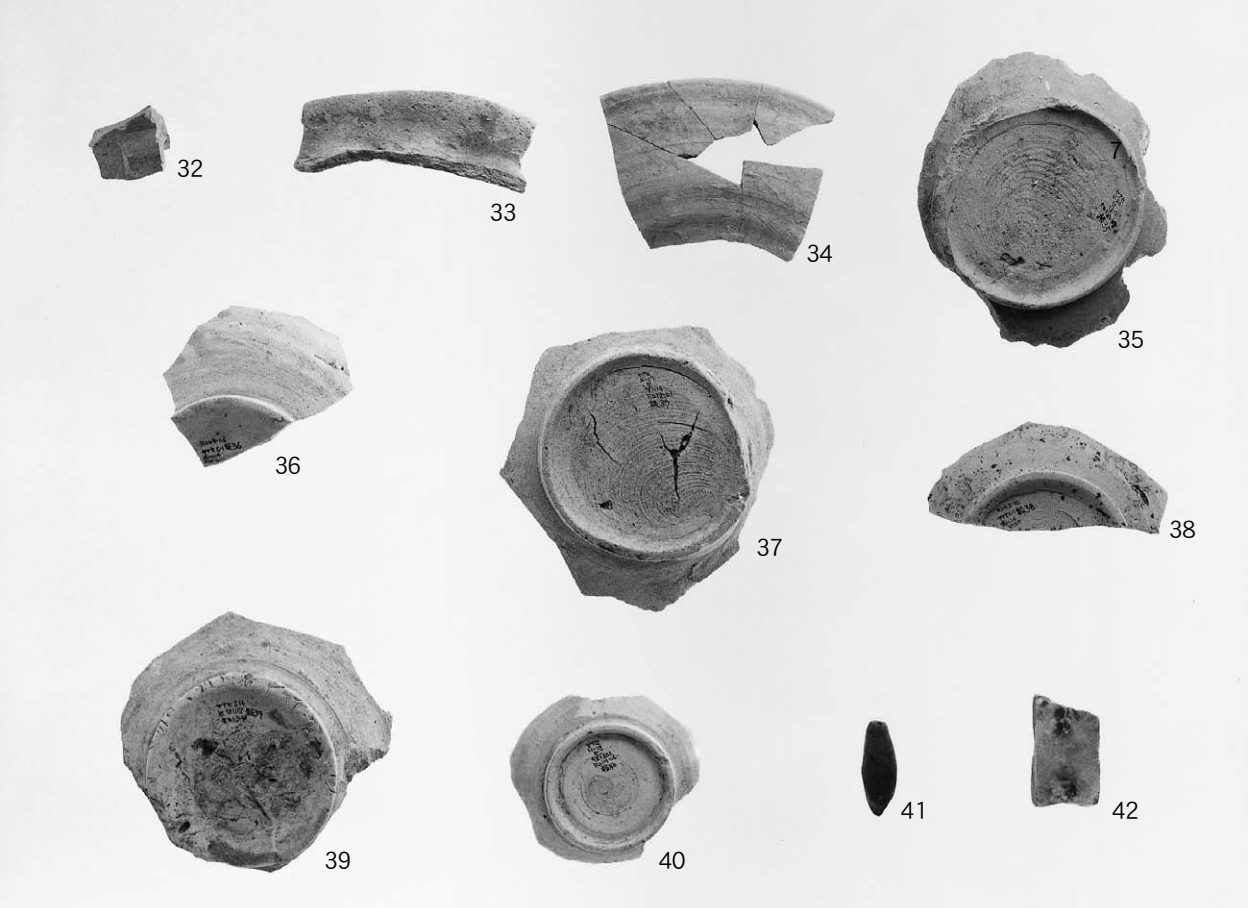
6

出土遺物




出土遺物


32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42

43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57

出土遺物

# 報　告　書　抄　録

| | |
|---|---|
| ふりがな | やなせいせきはっくつちょうさほうこく |
| 書名 | 梁瀬遺跡発掘調査報告 |
| 副書名 | |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 三重県埋蔵文化財調査報告 |
| シリーズ番号 | 115-21 |
| 編著者名 | 川合圭子・河北秀実・本堂弘之・村木一弥・宮田勝功・米山浩之 |
| 編集機関 | 三重県埋蔵文化財センター |
| 所在地 | 〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川 503 TEL 0596-52-1732 |
| 発行年月日 | 西暦 2004 年 3 月 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯<br>°′″ | 東経<br>°′″ | 調査期間 | 調査面積<br>㎡ | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| やなせいせき<br>梁瀬遺跡 | みえけんつしのだあざたかくり<br>三重県津市野田字高栗 | 201 | 848 | 34°42′47″ | 136°28′22″ | 19981116~<br>19990128 | 3,620 | 一般国道中勢道路建設事業 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 梁瀬遺跡 | 集落跡・道路跡 | 平安～鎌倉時代 | 掘立柱建物・井戸・溝・道路・土坑 | 土師器・山茶椀 | |


三重県埋蔵文化財調査報告 115-21
梁瀬遺跡発掘調査報告
2004. 3

編集
発行　三重県埋蔵文化財センター

印刷　千巻印刷産業株式会社